
魔法少女リリカルなのはって何？

平民

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはって何？

【NZコード】

NZ367Z

【作者名】

平民

【あらすじ】

この世から死んでいった主人公の前に現れたのは神と名乗るもので転生させてくれるという。主人公は原作知識もないまま、生きていけるのか？

注意 現実にある団体や場所などとは関係がありません。
さらにこれは作者の妄想の垂れ流しです。処女作ですので駄文です。

注意点（前書き）

何故書いたんだろうか . . .

注意点

この作品を読むにあたっての注意点

作者は厨二病でありそれが嫌な方は戻るなり、ブラウザを閉じてください

この作品は魔法少女リリカルなのはとあります。が作者は最近見たばかりなので更新はかなり遅いです

原作が崩壊する可能性があります。それらが嫌な方も戻るなりブラウザを閉じてください

ご都合主義、主人公最強が嫌な方も戻るなり、ブラウザを閉じてください

作者はこれが始めてなので改善点などを教えてくれるとありがたいです（これは別にかまいません）

文がおかしいところもありますので矛盾しているかもしません。

リリカルなのはと在りますがあまり関係ありません

以上の注意点を確認し、作者の妄想を受け入れられる方のみ進んでください

注意点（後書き）

反省も後悔もしている。

プロローグ（前書き）

駄文で拙い文ですがどうぞ

プロローグ

なぜ、ここにいるんだらう。なぜ、田の前に頭が光輝いて髪が異常なほど長いおっさんがいるんだろう

おかしい、何かがおかしい俺は確か死んだはずなのに生きていると思える。

とりあえずなぜ死んだのか思い出してみよう・・・・・

病院で入院。原因不明の病気だったかな?

「はあ、暇だ」

そう呟く、入院なんて退屈なだけだろうにじる飯はあまりおいしくないし、ああ鬱になる。そう思いつつパソコンをつける何故かパソコンは使ってもいいらしい病院なのに・・・・・とりあえずお気に入りのファンフィクション小説を見る

「いいなあ。色々なチートや転生ボーナスもらえて。」

そういう、更新されている物の続きを見る。ここにのを見ているところ、胸が熱くなるというよりもなぜ、ここまで平和な日々を送ってきたのに簡単に能力を把握して簡単に戦えるのか思う。まあ、現実じゃないからあまり気にしないほうがいいと思う。

このような毎日をもう何年、何十年と繰り返している。元気なときと比べるとただベットにいるか、いないかぐらいしか変わらないと思う。今頃元気だつたら中学三年で受験勉強かな？そう思うと嫌になってくる。ああ本氣で鬱になりそうだ、いややる気が起きないの方が正しいのか？不意に外を見ると夕焼けが病院の周りにある木と重なつて綺麗に見えた。味気のない病院の夕食を食べつつパソコンの某動画サイトを見る。もちろんアニメだ。夕食を食べ終わり動画の続きを見る。

眠くなってきた。時計を見る、もう消灯時間だ。パソコンを消し、掛け布団をかぶりそして目をつぶる

電気が暗くなる、消灯時間が来たようだ俺はいつまでこのような毎日が単調で、平凡であり、平和な変わらない無限ループの中でいつまで“”していけばいいのだろうか？だんだんと眠くなってきた。このまま明日も変わらない毎日が来るのか・・・そう思いため息をつく。ああ幸せが逃げていく。もう考えるのはやめよ。俺は鬱になりかけのまま暗い意識の中に落ちていった

そう、俺がいつまでも続していく平凡で、平和な、単調な作業をこなしていくだけの無限ループの日々が終わるとも知らずに・・・

プロローグ（後書き）

パソコンはもちろんノートパソコンであり病院の設定は自分の勝手な想像です

プロローグ 突然の終わり（前書き）

原作はまだ入りません。なぜならまだまとまっていないから。

プロローグ 突然の終わり

そう、突然だつたのだ。急に目が覚めて気分が悪くなつてくれる。苦しい、苦しい息ができない。

落ち着け、落ち着くんだ。よくあるだろつ冷静になれ。よくあると いうのはたまに気分が悪くなるのだ

しかし、今までのとは比にならないくらい苦しくなつた。俺は必死にナースコールを押そうとした。しかし・・・押せなかつたいや腕が痺れて動かないのだ。それは、自分のものなのに自分ものじゃないようには感じた。

やばい、やばい。これってよくいう詰んだといいつづ状況なのか？なぜかそう思つた。

でも…これだけは思つて死にたくないゝそうだ、死にたくないのだ。俺はまだ14という若いまま死にたくないのだ両親の半分以下、弟の半分以上で・・・

だけど、俺はどこかであきらめていたのかもしれない生きるということを。そう思つと最後の足掻きだが俺は思い切り腕を上げようと したが痛い、痛すぎる声をあげようとしても空気のヒューヒューと いう音しか鳴らない

ああ、やつぱりダメかそう思い意識が闇に落ちていった

結果的には助かつたのだ。俺は自分が生きている中で一番うれしか

つたことに違いない

親と医者の声が聞こえる

「どうあれ、まあ大丈夫でしょう。」

いやいや、まあなんだよ。まあ。

「おじがどうぞ。」「

やう、親の声が聞こえる

「後遺症もあしませんし。このままいけば助かるでしょう。」

ああ、助かるのか俺はやう思ひ、意識を闇の中に落としていた。

なぜ、ここにいるんだろう。俺は助かったはずじゃなかつたのか？
すべてを思い出し終わり田の前にいるおっさんみたいなおじいさんが俺の心を見透かしたよひくつ

「お前は死んだのだよ。」

やう俺に向かって言った。

プロローグ 突然の終わり（後書き）

よくある転生者ですね。テンプレかもしませんけど・・・

1 / 6 少し修正

プロローグ 死んだ先の行方（前書き）

テンションがあがり、宿題も手につかない。しかし俺は今年には終わらせる！
たぶん：

プロローグ 死んだ先の行方

「お前は死んだのだよ。」

「――なぜこんなんだ？俺はなぜここにいるのか？」

「一つ目の質問の答えは、――はお前たちで言う死んだ先の世界。簡単に言うと天国や地獄だ。一つ目はお前が死んだからだ。一つ目で言つた通り死んだ先の世界にいるのだから当たり前だろ？？」

俺は理解できなかつた。なぜ？助かつたんぢゃないか？そう思つと異常に苛立つてきた。

「そう怒るなよ。死んだものは仕方がないことで願えば帰れるのか？割り切れよ。お前はよく割り切つてきただろ？？」

違う、俺は割り切つていない。諦めていたのだ。突然の原因不明の病氣にかかり諦めていたのだ。

ここに来た時に死んだはずなのにと思つたのもどこかで諦めていたかもしけないからだ。

よく見る小説の設定のようなところにいたからである。たしか、転生者の物だつた気がする

「なあ、そう落ち込むなつてこつちも仕方がないんだよ。お前が思つてゐる転生物の書類が～とか、失敗して～とかじゃないからな。」

落ち込む？そんな顔をしているのか？苛立ちじやなくて？

「ああ、じて。この世の中が信じられないって顔をしてるよ。

」

それはいきなり死んだといわれたらどうなるだろ？

「俺は……ビツなるんだ。」

「このまま消えるか？…とこよつも、消すんだが。」

嫌だ、嫌だ、死にたくない。その前に親に迷惑を掛けたことを謝らないといけない。

「嫌だ。俺は消えたくない。俺は死にたくない！」

「やつか…よく言った！」

「はい？」

反射的に疑問が口に出でいた

「ここからは俺の管理じゃないからな。ちよつと待つて、親父を呼んでくる。」

え？ 親父？ オヤジ？ 親父って父だよな？ 英語で father だつけ？ とりあえず、目の前にいたおっさん？ の父が出てくるのか？ 疑問や謎を残したままこの場で考えていたら

「何じゃよ。今アニメで感動の所なんじやよっ最終回なんじやよっ。」

「つるせえよ。親父がポンポン書類を適当に押すから謹慎食ひたんだろう？」

「つるせえとは何事じやー最終回で感動の場面じやみーそこで止められた者の怒りを思い知れ！」

「あほか。今は神通力は使えないだろ？？」

「ふつ。あまいわーくー」おー。放心しているや。

「ああ、やつじやな。」

そう聞こえたとき俺はどんな顔をしていたのだろ？

プロローグ 死んだ先の行方（後書き）

トントン拍子で進めて行きたいです。

プロローグ これから準備（前書き）

Q こんなに飛ばして大丈夫なのか？

A 無理だと思います。

プロローグ これから準備

とつあえず現状を確認だ。

俺知らないといひにいる なぜこいつなったか思い出す オッサン?
登場なんか消すとか 消えたくないといつ 親父を呼びに行く
アニメのことで怒るおじこさん登場だな。

とつあえず俺はどうなるのか不安になつててきた。

「ふむ、でなんじゃこの供は?」

「消やひとつ思つたら消えたくないんだよ。」

「わうか、でなぜ消わない?」

「面白そつだから。」

あれ?俺つて面白いのか?ただ理不尽な死を受け入れたくないから
消えたくないと言つた訳で

「で、お主は死にたくないのか?」

「ああ。」

「それがつらことでもか?」

「どものよつてつらことのか教えてもらいたいのだが?」

「なぜ敬語じやないんじや?神様じやよ?最高神じやよ?」「テンプ
ですね。」話の途中でしゃべるな!「すいません」これだから最

近の若い者は・・・

なんかぶつぶつ言つてるけれど大丈夫なのか?

「親父、俺まだ仕事残つてるから後よろしく。」

そういう最初にいたおっさん?は消えた。やはり、こーは俺の知りてこるところじゃない

「わひと、お主を転生させるがどうがいい?」

「え?これって俺が決めるの?」

「まあやうじたいのじゃが、わしは最高神じゃからひとつおきの世界に転生させてやろ!。」

「あひがとうござります?」

「なぜ疑問なんじゃ?まあ、聞いて驚け!その名もく魔法少女リリカルなのは>じゃ!。」

「魔法少女リリカルなのは?それって何?」

疑問に思つたのでそう返すと最高神が

「な、知らないといふのかーあのすばらしいアニメを……」

なんか落ち込んでいるけどもつ動じないありえないことなんてないのだから

「まあ、その世界に行くためのボーナスのようなチートをやれりつー。」

「なんでもいいのか?」

「わしを誰だと思っている最高神じゅよ? 最高の神じゅよ? そんな
わしに不可能なんてない!」

なんか力説してこんなが疑問を述べる

「何個でもいいのか?」

「ああわしは最高信者からな。その前にたくさん書類失敗してたく
さん願いを叶えてやつたからな!」

「たくさんひどいくらいくつ?」

「ああ? わしは数十人じゃつたような?」

「やばい、」の最高神は書類を数十人分失敗して殺したといふことだ
よな?

「ああ、ちゃんと土下座して能力をやるとこつたら狂つたり叫
んで色々能力を・・・って聞いてる?」

「土下座ですむものなの?」

「ああ、許してくれるか聞いたらす」「いい笑顔で許してくれたん
じゃよ。」

「どんな人が来たのかおしえてくれませんか?」

「ああ？みんなその世界に絶望したり諦めていたからなあ。よく覚えておらん。」

「で、その世界に行くためのボーナスはこいつでもここと？」

「わからん。で、何を望むんじや。」

「やう、だな。まず動物と会話ができるよつ。あと足を早くしてく
れ。生活に困らないうちにお金をくれ。あとほんとうにかな
「なんじや？ その夢のないものね？ もつといれ、強く…かぎりなく強
く…とか一コポとナデポとかフラグを簡単に立てれるよつことかイ
ケメンにとかないのか？」

「最高神さん、別にいいんです。最強になりたいわけじゃないし。」

「じやが心の奥では願つてこると思つたじやが？」

「なら、それなら大切なものを守れる力をください。」

「わかった それでいいんじやな？」

「いや、まだです。向こうの世界にこつても願いをかなえさせてく
ださい」

「これは保険だ。向こうで何が起つるかわからなうこと

「ア解じや。」

プロローグ これから準備（後書き）

会話が長くなりました

作者も魔法少女リリカルなのははよく知りません
変なところで切ってしまいすみません

プロローグ セリナの準備（前書き）

まだ続くプロローグといつも時間稼ぎ

プロローグ わりなる準備

「了解じゃ。」

「そつ最高神が言つと田の前が光り輝いて……なんてことは起きなかつた。少しがつかりだ

「なんじや？ その不満そうな顔は？ まあいいじゃらつその前にこれから転生するための世界は知つてこるか？」

「魔法少女リリカルなのはといつ世界だらつゝだがしかし、俺はそんなアニメは知らないぞ？」

「せうか……なうせ」のわしがお前にどれだけすばらしいのか教えてやるつー。」

そういうかなりあつく語り始めた……唾が飛んでくる。はあ鬱だ

～30分ぐらい経過～

「～どあるからしてとても…すげー！ 热い！ アニメなんじやー！」

～1時間ぐらい経過～

「わらに感動もできるーとしてもよこアニメなんじやー。」

～2時間ぐらい経過

「でーそんなーともすばらしくー！ わしのー！ 大好きなー世界にー！ 転生させてあげる訳なんじやああああああああああー！」

とても長い原作と関係ない」のアニメの世界がすばらしいか延々と聞かされた…まあ、ほぼ聞き流したのだが…

「でも結局どんな世界なんだ？」

「簡単に言つと魔法が使えるようになる！かも知れない世界じゃよ？」

「なぜ疑問なんだよ。」

「や」は努力しだいとこ「」とぞ。」

その後、少し原作について教えてもらいました。ストレージ？やイントリジョント？コニゾン？などのデバイスという物を使うことなどを知りましたがよく分からないので、デバイスって何だよ。みたいな感じです

「で、欲しくならないか？デバイスを？欲？」「別にいりませんよ。」なんじやとーどれぐらこす？？のか分かつたじやろ？いまなら好きなデバイスで名前も付けられてバリアジャケットのデザインも考えられるんじやよ？そんなお得な機会なんてないんじやよ？」

「別に最強をを目指している訳じやないし別にいらないと思いますよ？」

「甘い、それは正論じやがとても甘い考えじやよ。これから行く世界は死亡フラグがあるんじやよ？そんな危険から守るために一家に一台のデバイスー。じづじや？欲しくなつたじやねりつー。」

なぜそんな通販みたいな言い方なのか分からぬがいるものはないらしいそう思う

「まあそこまで断るならいいじゃね?」(お前の病院生活で考へていた痛い妄想をつめこんでやるわ!…そして勝手に送つてやるー。)「

なぜか寒気がした。」(背中に虫が這いずり回るような生命の危機に似た何かを感じた

「まあそこまで断るのは初めてじゃしな。他の転生者はやはり狂喜乱舞しておつたのに…」

それは、原作を知りどうすればいいか知つていてるからでは?いやその前に“他の転生者”と言つたか?

「なあ最高神さん他の転生者って何人いるんだ?」

「まあざつと、わしの書類ミスで数十人…約40人くらいで他の所からくるのをあわせると数百人は超えるんじゃないのか?」

その言葉を聞いたとき戦慄した。まずこの神の他に神がたくさんいて、しかもそれらの神が書類ミスなどでも無意味に死んでいるのか?その前にポンポンと書類ミスなどで死んでも大丈夫なのか?

「何を考えているか大体分かるんじゃが書類ミスなんて夜にやらせるからミスをするんじゃーもつと自由時間を一週休五日ーこれぐらいくれてもいいと思つんじゃよ。」

「いや、あなた最高神でしょ?それが休んでどうするんですか?」

「べつに、わしはもう人間でいつ定年だしておじいちゃんだして
とてもよくできる息子もいるし、わしは！そつ！息子に最高神をゆ
ずつて引退したいんじやあああ！」

「そんな最高神で大丈夫か？」

「大丈夫だ、問題ない（キリッ）」

うわあ決め顔？と言うのか？とても気分が悪くなるような笑顔でサ
ムズアップとかありえない

「ネタはおいといつたらなぜゆづらうないんだ？」

「まだあこつは頭が固いからのひ……」

す”に遠い目をしているんだが…まあ確かに固そうだつたしな

「とまあ〔冗談は〕ここまでにして行こうつかのひ」

そういうと最高神がまとうオーラ？みたいのを感じた

「汝は前世で幸せな顔をして死んでいった！なのに…まだ死にたく
ないと申すか…」

「はい…」

返事に自然と力が入る

「ならば汝を転生させてやろう！行き先は転生者が数多くいる…く
魔法少女リリカルなのは」の世界に連れて行ってやろう…」

ああ、長かった、とても長かったといつあるえず来世にまつたるよつだ。
そつ思つと

田の前には

すゞく息切れをしていて今にも死にそうな最高神が地面に倒れていた

「わし、今、力を使えないんじやつた」

おこ今までの感動を返してくれよ

プロローグ わがなる準備（後書き）

じつにこようですが作者は原作の設定などを知りません。
さらにまだぐだぐだ続けていき原作に行くまで時間がかかると思います。

後、なぜ時間がぐらいなのかは時計がないからです

プロローグ　といつかの補足と時間稼ぎ（前書き）

か
プロローグがこんなに長いなんて原作にいつになつたらいけるもの

プロローグ とことんの補足と時間稼ぎ

前回のあらすじ

最高神（笑）が自分のマスクに隠されました

「なあ、わつとき最高神（笑）とか思つたじやねん。」

やべ顔に出でたか？

「こや心を読んだのじやよ。心をな。」

なんか初めて最高神と思つた

「なぜ初めてなんじや…ちくしょおおおー！ゲホッゲホッ」

「無駄に叫ぶからむせむだよ。」

「まあ安心するんじやな。いまわしの力を一時的に解放してくれる
みづ頼んでおいたから」

あれ？こいつが最高しこ？「最高神よつ上がりこむんじやよ…」

「わしの上にも神がいるんじやよ。確か世界の管理者とかにわれて
こいつのや。

じゃあ力関係はこんな感じか？

世界の管理者へ最高神へ最高神の息子へ田の前にいる最高神へ
へへへへへ（越えられない壁）へへへへへへへ一般の神

「まあそんな感じじゃの。それとお前が行く世界は平行世界、パラレルワールドというところじゃなそれだから好きなように原作に介入したり原作ブレイクしていいんじゃよ。それに、お前より先に行つたやつと同じような年齢になつておるから安心せい。」

よかつたこれで遅いから相手に攻撃されても逃げれる

「じゃがそれぞれの意志で年齢を変更してからこいつたやつもいるんじゃよ。」

「あ、やっぱこれって詰んだとか死亡フラグというかのなんじゃ…

「安心せい。よほど目立たない限り見つかる可能性は少ないじゃろう…多分」

「おー、多分つて何だよ多分つて、それつて見つかったら即ゲームオーバーじゃねえかよ。」

「そのためにわざわざこうデバイスがいるか聞いたの。」

「先に行つてくれよ。」

「お主は原作介入するつもりはないんじゃから安心すればいい。」

そうだった。俺は介入する気なんてないんだから…だがもし、ものことが合つたら？俺が思う言葉にこうある“ポジティブに行動し、ネガティブに考える”とつまり樂観的に行動しながらも、悲觀的に物事を考えろということだ。ピンチになつたら逃げればいいそういう思い考えるのをやめた

（数時間後）

「なあほんとに原作介入して原作ブレイクしないの？」

「じつじつ。」

「なあお願いじゃよ、失礼します。」

「何じゃよ。今説得しているのに。」

「力を一時的に使つてもいいと許可が下りました。」

「分かった。下がつてよいぞ。」

「失礼します。」

部下の人？なのかとりあえずこの神から開放されるといつづれしくなつてきた

「なんじゃよその嬉しそうの顔は。まあこれでお前も転生できるわ
りがたく思ふ。」

やつた転生であるけれど前世でできなかつた事ができるー。

「わあこいつに来るんじゃよ。転生させるか？。」

そして俺は最高神の面つとめを行つた

「じゃあ転生させねば。」

「はい。失敗はしないでくださいね。」

「分かつておるでは行くが……」

最高神がそうこうと体に何かが来る

「ああ転生するんじゃー！場所はく魔法少女リリカルなのはの世界！」

「ああ言ひ忘れておつた。テンプレと言わたからもううん赤子のときから意識はあるからな。せいぜい黒歴史を作るがいい。ああ、ああ、氣味が悪いと言われて捨てられることはないからな。」

最後に最高神はこういい俺を転生させた。最後にいうないテンプレところづかの最悪のものを残して

プロローグ といづかの補足と時間稼ぎ（後書き）

やつと先に進めやつですね

第一話 始まつた新しき命

目を開けるとそこには知らない天ゞよ「ほら、見て目を開けたわよ。
「はい？だれだらうか、知らない女の人と男の人が目の前にいるの
だが

「本当か！ああ、かわいいな！流石私とお前の息子だな！」

このテンションの高い人がお父さんになるのか、というよりも前世
の父と同じ顔とは一体？

「ちょっとさういふとこわよ。」

「はい・・・・すみません。」

あ、お母さんも前世の母と同じだな。だが両親が同じだと前世とあ

まり変わらないような気が・・・

なんか眠くなつてきた。そう思い目を閉じて眠りに着いた。

流石にあれは恥ずかしい。なぜなら赤子になつてるので何もでき
ないからだ。恥ずかしい思いをあんなにするなんて思わなかつた。
オムツを替えられるときが一番つらかつた。だつて鼻で笑うんだよ
？俺のナニを見て笑うんだよ？あれはとてつもない苦痛だつた。泣
きたくなつたがそこは必死にこらえて耐えたよ？泣きそなうのを必
死に耐えたんだよ？

ああ、血分の名前は前世と同じでしたね。両親も丸々同じでしたね。ついでに重いと家もおじいちゃんも、おばあちゃんも同じだった。ここまで同じだと軽い今までのことは全部夢で最高神も全部夢だったのか？錯覚を覚えるぐらいに不思議に思つた。しかし、今までのものは全部現実であり、前世もその記憶も大切なものなのだ。だからあの記憶や思い出を“夢”と言つ言葉で終わらせたくないのだ。とつあえずこんなことを考える1歳児なんていいるのか？と思つ。離乳食はおいしくなかつた。病院食を思い出して泣きそうになつた。夜泣きなんてしてないし比較的おかしいほうに入るのだが両親は

「この子、夜泣きしないのよ？とても強い子だと思わない？」

「やうだな。もしかして前世の記憶かなんかあるんじゃないかな？」

「そんな訳あるわけないじゃない。」

「やうだよなあ。」

父よ何故そんなに鋭いんだ？母よ俺は強くない。ただ声を出さないよつて隠れて泣いているだけだ。

こんな感じで1歳児の毎日は過ぎていった。

第一話 始まった新しき命（後書き）

短いのは自分が長く書けないからです。文才が欲しい。

第一話 七五三で見た転生者（前書き）

原作に行きたくても行けない

第一話 七五三見た転生者

はい、今私は七五三のために神社に来ています。何故自分のことを
私と言つていいのかと言つと俺と言つよりも私の方がしつくづくる
からだ。だつて、三歳の子が“俺”なんていうと他の転生者にばれ
ると思ったからだ。そんなことを考えていると

「ほら、千歳飴だぞ。」

そう言われ千歳飴をもらひ。前世だとこれが一番の楽しみだつたな
あ。着物とか、きつくて動きにくいし、何故神社までくるんだよ、
とか思つてたし。千歳飴のためだけに神社に来るといつても過言で
はないと思つ。前世でも弟の千歳飴をもらつて食べていたし。

そんなことを思つていると明らかに場違いなやつがいた。だつてさ
金髪で両耳の色が違うオッドアイ?といわれる目をした子供だよ?
おまけにイケメンだしさ、親もいかにも金を持つている感じでさ、
両親ともイケメンと美人とかどれだけ願えばああなるんだ?とか思
つているとその親子たちの声が聞こえてきた。

「ねえ、おなががすいた早くご飯食べたい。」

「ちょっと待つてくれよ。ラルフ。」

なるほど。あの明らかに場から浮いておりそれでいて自己中心そつ
で、自分はすごいやつと思つていそうなやつはラルフというのか。
もしも本当に転生者だつたらどうしようか?

「ん? どうした?」

「えつ、なんでもないよ。きこしないで。」

「ああ、そつかならしいんだが。」

危ない危ない、どうやら考え方をしていたらしい。と同時にいつも両親はあの親子をみて何も感じないのか？聞いてみよう

「あの子つてすじくない？」

「ん？あの金髪の子か？別に何も感じないぞ？といつよりも俺はお前が一番だよ。」

と言ふ、父は私を抱き上げてこう言つてくれた。そのことがとても嬉しいと思つた。

“私”は“俺”であり“俺”は“私”であるのだ。つまり俺といつ前の世界の人でもあり、私といつこの世界にいる“じぐく”普通の一般人なのだ。そう思ふと泣きたくなってきた。確かに俺は前の世界のことを忘れられないが今はこの世界の生きる人なのだ。

／ラルフSide／

「ねえ、おなかがすいた早く」飯食べたい。」

「ちよつと待つてくれよ。ラルフ。」

そう会話をする。何故こうなったのか俺は知っている。そしてこの世界のことも。何故こうなったのか思い出してみよう。

俺は死んだのだ。何でも、神が書類ミスをしたんだとよ。なんてお約束なんだと思っていたがこの際動でもいい、なぜならばこのまま行けば神が出てきて・・・・・

「スマスマセンドシタ。」

なぜかそういう下座をする。神といつ者か地に座り謝つてくれる。

「ついつい、うつかりミスをしてしまったのじゃ。じゃからこのことを上の者にばれないように」他の世界に転生させてくれるんだろう?「ううじやー話が早くて助かるの?。ん?どうかしたのか?」

まじかよ。本当に転生できるのか。やっぱ嬉しい!笑いがこみ上げてくるーよしーこうなつたら転生特典をもらつて楽しくくらしてやるぜー!

「で、転生させるための世界なんじゃがく魔法少女リリカルなのはへの世界でいいか?」

「ああ、別にかまわない。」

「マジかよ。あのアニメかよー! これは嬉しい誤算と言つやつか?」

「そしてその世界に何もなしで送るだなんて、最高神としての名が許さないんじゃー」と言つて何でも好きなのを言つてみよー。」

「そうだな。まずはすげーイケメンにしてくれー! もちろん金髪のオッドアイでー! あとはニコポ、ナデポ、最初から最高の能力値でお願いします。ついでに両親もイケメンと美人でー!」

「分かった。最高神にできぬことなどない!」

そういわれると俺の体が変わつていぐ。俺のこの自分でも嫌だった容姿が変わっていく。

「よし、では幸運を祈るぞ。デバイスは転生する世界で誕生日にもらえるからなー!」

「そういわれた俺は光の中に消えていった。とても楽しみだなあ よしー原作ブレイクしてやるぜー!」

↓ side out ↓

「その後の最高神」

「楽しみじゃの～うあやつ以外にもたくさん転生者がいるというのに・・・まあ詳しいことを聞かないあやつがわるいんじゃから仕方ないのう。さてと、アニメの続きでもみようかのう。あやつで何十人じやつたかのう。まあ、後で息子に聞いてみるか。」

第一話　七五三で見た転生者（後書き）

他の転生者ができましたがこれから出でてくるとは限りません。ついでに言つと転生者は基本イケメンやらかっこよくだと願つているので簡単に見つけることができると思います。

第三話 ハレゼント～（繪書モ）

これをや。書いていいとモクリスマスなんだぜ？

第三話 プレゼント？

七五三から口が過ぎて、クリスマスです。せっぱりクリスマスは楽しくやらないとね！ヒヤッホー！すみません。興奮しそぎたようですね。さらに今自分が分からないんです。

前に『“私”は“俺”であり“俺”は“私”』なんて事を言つたせいで余計に自分が誰だか・・・・まあ、それは置いてクリスマスは子供ならテンションが上がるものー！馳走にプレゼントにケーキ！考えただけでテンションがあるぜ！

「わひと、食べるかー！」

「「「いただきます。」「」」

父の言葉で「馳走を食べる。

うん。おこしごとこいつもやつぱり前世とほぼ同じ味だとか・・・・・

じいじが本当に転生した後の世界なのか分からなくなります。前世と同じ両親や親戚、同じ家、同じ味、違うことだなんていじが海鳴市といひじどべらーかな？

「どうした？食べないのか？」

「食べぬよ。」

「やつか。」

」の「じる考え方すぎて、両親（特に父）」のようになに言われる。母があり喋らなくなつたがただ仕事が忙しいだけなんだ。父が家で主夫をやり、母がバリバリのキャリアウーマンと言われるような仕事ぶりなのだ。

「いじりやつせま。」

そういう、洗面台まで歩いていく。三歳ださう自分で歯を磨くよ？恥ずかしい思いはあまりしたくないから。このことを親は「もう自分でできるのか。すごいな。」や「いつの間に一人で・・・」なんて事を言つていたが過保護すぎではないか？と思つべらごである。

とりあえず歯を磨き終わり、布団に入る。お風呂はもう入ったからいいや。やつ思つとすぐに布団のところまで行く。やべ、超眠い。だんだん・・・・・まぶ・・・たが・・・・そう思つたとたん深い眠りについた。

「ん・・・・・ねみー・・・・・」

田をこすりつつ洗面に行き顔を洗う。・・・・・よし、田が覚めた。とりあえず冬の水は冷たい。だから、すぐ田が覚める。とりあえず、リビングに行こうか。

クリスマスツリーの近くに、プレゼントらしきものがある。きれいに包装されてるよ。なんだろうか？しかしそれよりも隣にある手紙のようなものがとても気になる。ずーと気になる。どれぐらい気になるのかと言つと、とても大好きな番組がひたすたに最終回までどんどん伸ばして先がとても気になるような感覚だ。とりあえずこつこつは両親のものではないだろ？。そう思い手紙を見た。

拝啓

おっすわじじゅよ最高神じよ。そちらの世界ではクリスマスと呼ばれる祭りの中なんじやろ？だからわしもプレゼントを贈ることにしたのじやよ。とてもお前ことって嬉しいものじやう。じやかから、わしのことを讃めたたえてくれよーそれじや。そういうことなのでよいかへったのむ。

敬具

テレフォンカード（最高神様直通）をてにいれたぞ！

「・・・いやいらないし・・・」

そう呟いた

第二話 プレゼンテーション（後書き）

これは例の向こうでも願いを叶えるところアイテムです

第四話 誕生日あれば転生した日（前書き）

ありがとうございます。書きたいことが書けない

第四話 誕生日それは転生した日

テレカを手に入れた後、親からのプレゼントは炊飯器でした。なぜだ・・・・・

とりあえず、テレカを使うために公衆電話へ、見た目3歳だが精神的なものは大人に近いはず。しかし、受話器に届かない。しかたないからおもいきり跳んだ、だが届かない。

なぜテレカなんだ！電話番号でもいいじゃないか！そう思いながらも悪戦苦闘しつつも必死に頑張る。そうだコードの部分をどうにかすればいいじゃんか・・・・・・

「もしもし」

「なんじゃ、今いとこなんじゃよ。ラスボスだから早めに用件を言べ。」

「なぜテレカなんだよ。」

「電話番号なんて、教えられるか！」

「じゃあなぜそこにつながるんだ？」「ね。」

「最高神を甘く見るなよ。それくらい簡単なことじゃよ。」

「もうじやなくて、なぜテレカに電話番号が書いてあるのかが知りたいわけなんだが。」

「え？ だつてそれがないと電話つながらないじやね？」

「わざ電話番号なんて教えられるかーってこつてたじやないか。」

「じゃが、テレカを使わないと何は繋がらないから安心なんじや。」

「だが、もし落としたり、なくしたりどうするんだ？」

「そんなことはないぞ。なくしても貰ひとくと並んであるみたいに設置してあるからな。」

「ええよそれ、で話は変わるんだが願いは何回まで叶えてくれるんだ？」

「まあ何回も叶えてるとつまらっこ……じゃなくて上の者にばれるから3回が一番可能じやな。じゃが、話すことは可能じやかり話したことやら質問があるときほかにどこでじやうつ。」

「分かった。3回までだな。じゃな。」

「うむ。」

受話器を置くと、ジーと音が鳴るとともにテレカが出された。とつあえず帰るか。親も心配するだらうかい。

誕生日おめでとうと4歳になつた。長かった。それはそれは長い日々だった。

「誕生日おめでとう…」「…」

「あらがとう…」

そういうケーキにある蠅燭を吹き消す。うん、いつやつてもこれは楽しい。

「プレゼントは何?」

「これだよ。はい。」

そう言い渡されたのは、料理道具一式（フライパン、包丁、まな板、鍋などそのほか色々）と料理のレシピが載っている本。いやいやこれを貰つてもこれをどうすればいいのやら。何？これで料理でもしろと？一回も作つたことがないんだぞ？

「これで、お前も立派な主夫だ！」

「へへ？主夫…だと…まだ結婚もしていないし、夫でもないぞ？そして母よ笑つてないで助けてくれよ…

とまあ「こんな」とか「あつたがそれなりに楽しい一日だった。」

第四話 誕生日それは転生した日（後書き）

短い……もつと書きたかったのに……

第五話 誰もが通る黒歴史 前編（前書き）

ほほ説明回

第五話 誰もが通る黒歴史 前編

誕生日の次の日、田が覚めると「ひー」となまなま

じや顔でこる最高神がいた。ああ鬱だ……

「で何? 不法侵入で訴えるよ?」

「神じやから大丈夫じや。」

「神だからって向でもせめてこと細つなよ。」

「最高の神じやから大丈夫なんじや。」

「上にそりて他の神がいるつまに息子よつもできないお前がか?」

「ぐぬぬ…まあお前に能力を渡しに来ただけじやから。」

「ああ、動物と会話できるよつよ。あと足を早くしてくれ。生活に困らなくなごとにお金くれ。だつけ?」

「ナヘンじや。力が戻ってきたからな。」

「わうか。」

「「ひむ、ではこへん……ハツ」

「ん？ もう終わりか？」

「終わりじゃよ。あと追加でお前の思い出したくない痛い想像の能力もつけちゃったからな。」

「おい。追加の内容がひど過ぎるだろ。」

「まあこのためにお前に能力を渡さなかつたからな。後、デバイスに能力を入れようと思つたんじやが入りきらなかつたんじやが…」

「病院暇だつたからたくさん考えていたからな。仕方ない。」

「じゃが、かなり多くないか？ その前にじうしてそんなに冷静に対応できるんじや。もつと慌てればいいのに。」

「過ぎたことは仕方がない。だつてもう能力つけたんだろ？？」

「ああ。でもデバイスに入りきらなかつたからお前に古代遺産つまりロストロギアとして渡すこととしたから。」

「それって持つてるだけで犯罪とか捕まるとか言つてなかつたか。」

「大丈夫じゃよ。そこいら辺は抜かりがない。モーマンタイじや。」

「いや持つてるだけで犯罪臭するんだが。」

「お前以外のものが触れるとすると痛みが走るようにしてあるからの。」

「わーお。それなんて『都合主義』だよ。」

「神にぬかりなし！」

「で、何をくれるんだよ。」

「まあとで。誕生日プレゼントじゃからな。ここで渡すと危ないから一回お前も上に行くが。」

「おこ。上りでどうだよ。」

「お前も聞いたことがあるじゃね？ では逝くが。」

「おこ行くなって字が違つが…」

「で着いたぞ。」

「おこなんで姿が死ぬときと回じになつてこらんだ？」

「（）天界じゃから、簡単にいつとわしのプライベートルームじゃよ。」

「もしかしなくても俺死んだ？」

「仮死状態じゃな。じゃからわひと渡すから。まずはこの太刀と小太刀、それと木刀じゃな。」

「的確に俺の痛い妄想の産物を出すんだよねよ。」

「まあ仕方ないじゃん。これがロストロギアに固定されると困つかう。あと希少能力もつけておいたから。」

「だんだん最強設定になつてゐる氣がするんだが…」

「でも、そつしないとほかの最強設定の転生者に対抗できないんじやが。」

「なら仕方がない。痛いのもつらいのも嫌だからな。」

「じゃが、能力だけに頼るのはいかんから、今からわしの息子と戦つてもううからな。せいぜい頑張るんじやな。」

死亡フラグが立つた。そつ思つたのはこれで何回目だろ？

第五話 誰もが通る黒歴史 前編（後書き）

話が長くなつてた。

主人公紹介と人物紹介（前書き）

そういうえば名前とか書いてなかつた。名前が出るのはまだ先になる
と思います

主人公紹介と人物紹介

主人公

名前 現時点では不明

見た目 黒い髪で普通の顔。簡単に言うと印象に残りにくい。

武器 太刀 小太刀 木刀

性格 ヘタレ チキン ビビリ とだめなものが詰まっている

父 見た目 どこにでもいる人

説明 結婚しても働く人。前世の方はサラリーマン

母 見た目 普通の人

説明 結婚しても働く人。前世の方は主婦

ラルフ

見た目 金髪で右目が赤 左目が銀 イケメン

説明 最高神の書類ミスで死んでしまった人。イケメンにして、金髪のオッドアイ、ニコポ、ナデポ、最初から最高の能力値を最高神に願った。なぜ黒髪の両親から金髪が生まれてくるのか不明

ラルフの父と母

見た目 父は黒い髪で威厳のある顔でしかもイケメン 母は長い髪で美人

最高神

説明 すごいアニメやゲーム好き。おじいちゃんのような見た目。最高神なのに地位は最高神の中でも一番下で息子に抜かされている。なぜ、息子に最高神の座を渡さないのかというと、アニメやゲームを買うための収入源がなくなるから。

最高神の息子

説明 恐い人でも、優しい人。気まぐれ。とても強い、どれぐらい強いかというと初期から能力が強くゲームだったらレベル1でもクリアできるくらい。

世界の管理者

説明 最高神より上の存在。女人らしい

主人公紹介と人物紹介（後書き）

主人公設定は出てきたら追加かあとがきで簡単に説明します。

第六話 誰もが通る黒歴史 後編（前書き）

もう大晦日とか。時間が早く過ぎる気がする

第六話 誰もが通る黒歴史 後編

あらすじのようなもの立つた！死亡フラグが立つた！でも死んでるんですけどね。

「なんじゃ！」のあらすじは。

「心の心境です。」

「まあ死なない程度にがんばりなされ。」

「他人事だな。」

「他人じやからな。」

「で、俺は誰と戦えと？」

「ああ、この前転生したやつじやよ。」

「あの子供か。だが戦えるのかよ。一度も戦ったことないだらう。」

「しかし、能力だけに頼つたら技術や能力がいつまでたっても進化しないじゃらう。じやからお前に頼みたいのじやよ。」

「分かったよ。親父の頼みだからな。」

「ううい、なにかぶつぶつとこいつの前の風景が変わった。

「よしじやあやるか。」

「あのう、なんでそんなにやる気満々なんですか？」

「久しぶりだからな。殺るき満々だから死んだらいいめんな。」

「もう死んでるからいいです。」

「よし、よく言つた！やはりお前は面白い！」

そう言い、手を前に出す。そうすると手に槍のような棒状のものが出てくる。

「やるしかないのか…」

そういう俺も貰つた小太刀と木刀を構える。想像していたものと同じように右に木刀、左に小太刀を構える。想像と同じならば効果も能力もほぼ同じだろう。

「では、はじめるぞ。はじめい！」

「先手必勝！」

そういうおっさんが突っ込んでくる。うん、怖ええよ。笑いながら槍を前に突き出しつつ、フンッとかセイツとか乱れ突きやなぎ払いをしてくる。そのたび俺は、オウとかヤベとかいいつつ防戦一方だ。

「どうした？ 攻めないと勝てないぞ？」

「へへっ…やつてやひあー！」

木刀を戻し太刀にする。そのまま太刀を振るつ。軽い、これなういける！

「おおおおおおおおー！」

キインと高い鉄同士がぶつかる音がする。能力がそのまま使えるのなら！

「いけッ」

「む。」

俺が出したのはたくさんんの剣。これならかわせない！

「甘いな。」

そういうわれると俺は倒れていた。

「能力は強いがまだお前は強くないな。」

そういうわれると、急に眠くなつてきました。

第六話 誰もが通る黒歴史 後編（後書き）

戦闘描写が難しい

第七話 能力の把握（前書き）

あけましておめでとうございます

第七話 能力の把握

「でも、お前は自分の能力と武器をどれぐらい知っているんだ？」

「思い出せるのは、武器はほぼすべてだけど最高神が三つだけで頑張つてといわれたのでこれだけですかね。能力は大体分かれます。」

「じゃあ、武器の名前は？」

「魔王の太刀と魔王の小太刀ってなに笑ってるんですか。」

「厨」[ニ]。妄想[ニ]。www

「ひでえでかキャラ壊れませんか？」

「これが素の俺だよ。あんな堅苦しいものいつまでも続けられるかってんだよ。」

「ですよね。」

「その木刀は？」

「暁でしたかね？」

「なぜ暁なんだよ。」

「某ボディーガードのゲームがあつてそこからどうました。」

「効果といつか能力は？」

「太刀は何でも切れる。小太刀は何でも防げる。木刀は折れないし、鉄でも切れるというより太刀と小太刀の効果を半分ずつだった気がします。」

「やはり妄想だな。お前矛盾といつ言葉を知っているか？」

「それぐらい知っていますよ。そもそも太刀と小太刀の切れ味や能力は思いの力で変わるんですよ。攻めるときは太刀のほうが上になります。守るうとすると小太刀が上になります。」

「で他にはまだあるのか？」

「ありますよ。どちらかといつと希少技能？と呼ばれるものになるといったましたけど。」

「でそれはなんだ。」

「魔王の鎧とローデクラウンですね。」

「なんで魔王なんだよ。もつとほかにあるだろ？」

「魔王って強くてかつっこいじゃないですか。自分の信念の元に戦うとか。」

「すまんが、理解できない。で効果は？」

「ほほチートのすべての攻撃を跳ね返すと鶴の一聲といつより催眠や暗示に近いものだと思いますよ。」

「すべての攻撃を跳ね返すとか小太刀いらぬいじゃないかよ。」

「鎧は基本見えないし、常時展開ともできないうから仕方がないよ。」

「そっちの王冠もどいだろ？ 暗示とか催眠とか使えれば簡単に勝てるじゃないか。」

「使うときは限定されるから大丈夫だし、使おうとか思わないよ。ただの飾り。」

「そうか。ならいいんだ。他は何があるんだ？」

「よくあるものばかりですよ。超回復とか瞬間回復とか。でも基本は創造力“想像や妄想、空想を現実に創造する”といつシンブルな能力ですよ。」

「そ…そ…そ…やつぱりチートだな。」

「仕方ありませんよ。思い出したくない過去を思い出さないと死ぬかもしれないんですから。」

「他の転生者…か。」

「ええそうです。」

「だが俺の親父だけでなく、他の神もミスで転生させているからな。『え、でも同じ世界じゃなくて平行世界に送ればいいんじゃ。』そつは行かないんだよ。同じところに行かせてどうかわるのかを見るために送るのだから。」

「迷惑な話ですね。」

「やうだな。」

「じゃ、帰ります。」

「どうやって帰るんだよ。戻してやらないぞ。」

「大丈夫です。これがあれば。」

「太刀がどうしたんだ?」

「まあ見ててくださいよ」と。

「これは…空間を切つたのか?やはりチートというか規格外だな。」

「そりゃもつ妄想の産物ですから。じゃ帰ります。」

「気をつけろよ。」

「分かりました。」

そういう俺は元の場所に帰つた…どうやら俺以外の人にはこれらの道具は見えないらしい。

第七話 能力の把握（後書き）

これらは実際に黒歴史ノートとよく言われるものに書いてあります。それにしても地の文を書かないほうが楽とか…

武器 能力紹介（前書き）

どうしてこうなった

武器 能力紹介

武器

魔王の太刀

能力 何でも切れる。たとえ空間だらうとドアだらうと結界だらうと魔法だらうと切れる。ただし思いが弱いと能力もそれに応じて弱くなる。しかし弱くなつても強い。

魔王の小太刀

能力 如何なる物からも守る。というよりも太刀と相反するもの。やはりこちらも思いが弱いと守りが弱くなる。しかし弱くても強い。

木刀 暁

能力 御神木から作られた木刀。太刀と小太刀の能力を半分ずつ使えるようなもの。ただし、思いで労力は変わらないし空間も切れない、守る範囲も狭い。しかし、折れないし切れ味も落ちない。

希少技能 レアスキル

創造力

能力 想像つまり頭で考えたことを現実に持つてこれる。しかし魔力が必要なのでこのままだと使えない。使えば圧倒的強さを誇る。

魔王の鎧

能力 すべてを反射させる鎧というよりもバリアのほうが近い。範囲は魔力によつて変わるのでこれも中々使いにくい。普段は自分の周りのみ展開している。効果的にはドラ○Hで言うアタックカンタ、マホカンタ、吐息返しなど。

ロードクラウン

能力 別名 魔王の王冠と呼ばれるもの鶴の一聲ならぬ魔王の一聲。暗示や催眠効果を持つ。しかし、これも魔力がなくては使えない。だが、使つことはない。主人公曰くただの飾り。

瞬間回復・超回復

能力 これさえあれば普通の傷ならすぐに治る。なぜデメリットがないかというと原因不明の病だったためそれらをなくしたいという願いがあつたため。

武器 能力紹介（後書き）

いつのまにか最強設定に…まあでもデメリットや欠点もありますからね。

設定がかぶっていたら申し訳ない。

第八話 絶望 憎悪 裏切り 憤怒 1（前書き）

この話は書きたかった。でもうまく書けるか不安。
ここからオリジナルの設定がすこしづつあります

第八話 絶望 憎悪 裏切り 憤怒 1

気づいたらもう五歳になっていた。毎日武器や能力を少しづつ使い、技術や能力などを使いこなせるようになつたが魔力関係は使えない。まあ、太刀と小太刀それに木刀にも魔力はあるからそれから供給してもらえばいいことだし。

「よし、今日も終わりだな。だけど見た目が変わらないし、筋肉がついたようにもおもえないんだよな。」

そう、最高神から能力を貰つたあと毎日親が起きない時間。深夜から夜明けの時間ぐらいまで練習している。魔力がないから魔法が使えないけど結界は使えるとかおかしいこともあつた。その前に、レアスキルが何故こんなにあるのかと疑問に思った。最高神がいうには「生き残るためにあるのか」と疑問に思つた。最高神がいうと言われた。その後「おそらく“創造力”が一番のレアスキルなのだろうから管理局には気をつけるんじゃぞ。」とも言われた。

「今日は“サルでも分かる魔法のいろは”初級から上級まで”でもやるか。」

自分の小太刀とレアスキルで創つた結界の中で毎回試しているが、魔力がない魔法として出てくるため魔法ではない物が出てくる。最高神の息子が言つには「“創造力”が働いているから、魔法の形だけ出てくるんじゃないか。」との事

「もう時間か…仕方ない。」

とりあえずもう五歳だ。大事なことだから二回言つた。もう幼稚園

の中はカオスになつてゐる。転生者と思われる人たちがうじゅうじやといつてゐるのだ。大体が年中組の中にいる。他の年長や年少にもいる。もつみんな転生者は自分の能力をオン・オフで切り替えずにひたすらオンなのだから笑うと悲鳴に似た叫び、女子の頭撫でると顔を赤らめる。ああ、鬱だ。そんな中俺は部屋の隅っこに行き体育座りで、最高神の息子さんのオリと話す。名前は念話と一緒に教えてくれた。魔力がないため三つの武具はいつも常備している。軽いからそんなに気にならないし、邪魔にならない。最高神の優しい心遣いだとか。

『ああ、 もうやだ。 この幼稚園』

『そんな事いつならやめればいいじゃないか』

『やつはいかないからやなんだろ』

『それもやつだな』

『ああ 郁だ』

『頑張れよ。俺仕事だから』

『りょーかい』

といふな感じに親しくなつたのだ。いいやつだよなあオリつて。愚痴に付を合つてくれるし、仕事もできて強いとかありえない。

とまあ、こんな感じで幼稚園の一日常が過ぎてこぐ。授業とかできないよ、だつて授業にならないし。

～ある日の日曜日～

「今日は遠くに行こう。」

「どこに行くの。」

「ヨシカ海、自然あふれる場所だぞ。ほら準備して来い。」

「分かった。」

「つあえず、三つとも持つてこいつ。家においておへと不安だし。
とこうより気づいたら近くにあるもんなん。」

といひの変わって車の中

「幼稚園は楽しいか。」

「楽しくないよ。だって、みんな恐いから……」

「そんな恐いのか。」

「みんな日が恐いんだよ。男も女も……」

「そうか……」

ああ、話が続かない……もつ寝よつか。

第八話 絶望 憎悪 裏切り 憤怒 1（後書き）

タイトルの意味は後々出していきます。

番外 明けましてつて昨日だろ（前書き）

注意 この作品は外伝のようなものです
そしてこれは作者の愚痴です。
さらによく分かってません。番号をぶつた切りました。
楽しい気分を失いたくない方は見ないほうがいいかもしれません。

番外 明けましておめでたす

あらすじ

作者がぐれました。

「おこ、」のあらすじってなんだよ。」

「聞いてくれるか？」

「なんドリに面る？そしてドリは何処だ。今は家族と自然あふれる場所に行くといひだつただうつ。」

「聞いてくれるのか？」

「何」の無限ループ。オリ助けてー。」

「聞いてくれるのかー！」

「いや聞かないし。」

「あのな。これは昨日書きたかったんだ。だけどもお正月だからって調子に乗ったのが悪かった。

家に帰つてあこの気分で書いつと書いたら「あれ、部屋の様子がおかしい」と思つたら・・・」

「おこびついた。」

「まさかのフィルタリングだよー。まあモペー、やうひと思つたら、不適切サイトだし。このサイと開いひと開つたら、このサイトも不

適切だし・・・

「わざわざと続きを言へよ。」

「で、親が勝手に俺のパソコンをいじり、保護の何かを入れたときにフィルタリングを掛けたらしい。

でもさ。保護もフィルタリングも必要だけども！だけじゃ一急にできなくなるとか！」

「お・・・おう。」

「昨日はいつもなら起きている深夜に寝ていたんだ・・・でも現実は甘くなかった。

まさかの朝。誰も居ない！チャンスだ！と言わんばかりにパソコンのフィルタリングをどうにかしようと思つた。

だが何もできなかつた・・・

以前弟がフィルタリングを解除したときのように頑張つたさ。でもできなかつた。

で、俺が物に当たるのは悪いと思いながら色々殴つたり蹴つたりしたさ。でもそれもいけなかつた。」

「まさか・・・」

「殴つたら手から血出でくるわ、間接のところの皮剥けるわ、決め付けは蹴つたときには足の右中指がポキッと右がわに曲がるし爪はぼろぼろになつてし足の先の肉は抉れて真っ赤だし絆創膏もはるとすぐに血がにじんで意味がなくなるし、泣こうと思つたらなに馬鹿やつてるんだと思つたら笑いがともらなくなるし・・・・・・」

「なんだよ。明らかにお前が悪いだろ。」

「せう思ひにが、不眞寝したらもうこんな時間だし。朝の5時におきて馬鹿騒ぎして寝たらもう1~2時間たつてる。」

「じゃあ何でできてるんだよ。見れないはずだわ！」

「弟が朝の馬鹿騒ぎを聞いて親に言つたらしく。で、パソコン付けてから「何故できる・・・」と呟きながら書いているわけ。」

「やうかならもうこいだら。帰れ。」

「そうだね。もつ書き溜めて予約してあるし、一月の最後まで予約あるから・・・」

「勉強じりよ。」

「面倒。そしてやる気なし。これから「ペー」「な」と「ペー――――」なことがお前に起るからな。」

「だが、この作品見てる人がいると思つか?お気に入りはちりまつりあるが、駄文だし、感想なし・・・」

「いいんだよ。これは作者の妄想の垂れ流しで、糞な文なんだ。それにお前はもともと違う想像のキャラだつたんだ。」

「なん・・・だと・・・」

「もともと開示していない作品で書いていたのさ。だが友達が「リリなのつて面白いぜ」っていうからだったらと思って書いた。寧ろ断片的なことしか知らないから原作ブレイクだからな。」

「わざわざこんなことを書つたなよ。アホか。」

「アホでもここの中。『』でも蟲でもここ……」

「なんてマイナス思考。」

「そんなことはおことこて姫さんの作品『魔法少女リリカルなのは』って何?』を見ていただきありがとうございます。この先も続いていくと思うのでもこんな糞みたいな作品を見ていただいているだけで嬉しいです。

では皆さん、明けましておめでとうございます。今年もよろしくお願ひいたします。」

「でも普通昨日だよな。明けましておめでとう昨日だね。」

「うぬれこー」

番外 明けましてつて昨日だら（後書き）

はい。最後まで作者の愚痴を見ていただきありがとうございました。
今回出でたのは、主人公と私、平民でござります。
対話は地の文より楽！これだけは言えるー。
皆さんにとって今年がいい年でありますよつこ。
新年早々に私みたいに怪我しちゃ駄目ですよ。

第九話 絶望 憎悪 裏切り 憤怒 2（前書き）

タイトルが悪い意味で詐欺になりそう。

この話はいやな気分になるかもしませんので、新年早くからのいい気分をなくしたくない方は見ないでください。

しかしこの駄文の妄想の垂れ流しを呼んでいる人はいるのだろうか

⋮

第九話 絶望 憎悪 裏切り 憤怒 2

そこは自然に囲まれた場所だった。周りを見れば木々がたくさんある場所だった。

「さて山登りでもしながら自然を眺めるか。」

「ええそ'うね。」

親の話を聞くには山を登るらしい。たまにはリフレッシュもあるかな。

「山登り中」

「お父さんだらしないよ。もつと早く行こうよ。」

「ちょ…ちょっと待ってくれ。」

父が息切れをしながら登つてくる。俺？俺は修行しているからこれぐらいじゃ息は上がらんよ。母は俺と同じくらいに登つてくる。息切れしている父とはまったく正反対で疲れが見えない。

「あなた、運動不足なんじゃないの。」

「何故そんなに余裕なんだよ。」

「取引先に行くときは自分の足で行くのが基本ですか？」

「ああそうかい。」

～せりに立籠り中～

「セ…そろそろ戻りませんか？」

「あー。どうしてかしら?」

うわ、今すゞいい笑顔で言い放ったよ。父はすゞに悲しい顔して
るし、じつ…捨てられている犬みたいな懇願しているような顔。

「いいでしょ?」

「あつがどうぞります。母上様。」

母から許可が下りた瞬間、いい笑顔になつたよ。わがわがえりへ
違う。

「じゃあ帰るぞ。」

「分かつた。」

そのときだつた。何かの視線を感じる。品定めをしてこるやつな、
ねつとりとした感じだ。父と母には向けられていない。どうやら俺
だけのようだ。これが思春期特有の被害妄想というやつか…いやそ
んなはずはない。まだ続いている。ヤバイこれはヤバイ。全身から
嫌な汗が吹き出る。

「どうしたの?顔色悪いわよ?」

「な…なんでもないよ。」

母に強がりを叫ぶ。恐い、怖い、このよつた状態を恐怖といつのだ

ろうか。その前に一刻も早くこの山から抜け出したい。キモチワルイ視線から抜け出すために。

（下山中）

気づくと嫌な視線は消えていた。しかしそまだ鳥肌は收まらなかつた。あの視線は何だつたのだろうか…思い出すと怖くなつてきた。早く帰ろう。うんそれがいい。

（帰り道 車の中）

「ああ、久しぶりに疲れたなあ。早く帰つて寝たいよ。」

「その前に夕食を作つて寝てくださいね。」

「善処します。」

そんな毎日のようなやり取りをしていた。やはつこいつ毎日が変わらないことって素晴らしいことなんだよな。非日常よりも日常だよ。身を守る能力があつても使わないように生きて生きたいよな。

でも、そんな小さ~い小さい願いでも世界は無常に引き裂いてくる。

… そう俺が急に死んだよ！」

帰り道俺と両親が乗つて いる車にトラックが突つ込んできた。これを機に俺の人生は大きく歪み、それに応じて俺の生活も何もかもが変わってしまった。

第九話 絶望 憎悪 裏切り 憤怒 2（後書き）

タイトルの言葉は作者が好きな言葉です。そして、どうしてこうなつた。

第十話 絶望 憎悪 裏切り 憤怒 3（前書き）

この話も嫌な気分になります。注意しましたからね。ああ鬱だ…

第十話 絶望 憎悪 裏切り 憤怒 3

トラックが突っ込んできた。そのときのことはよく覚えている。父が思い切りブレークを踏みキキーッといつ耳に残るような高くうるさい音。母が俺を抱きしめてくれたこと。トラックの光がまぶしかったこと。あげればきりがないようなことがたくさんある。しかしこの後の光景を俺は忘れないだろう。

なぜならば…

鼻につくようなガソリンのきついにおい、その中にある血のむせ返るよひなにおい、母が俺をかばうようにして…長い鉄の棒のようなものに刺さっていること。そして他の鉄の棒が俺の胸に突き刺さっていることを確認したときの言葉にできないほどの後悔や悲しみに包まれている顔…そして、真っ赤に燃える炎の中で父がミラー越しにこちらを見て母と同じような顔をしていたことを…・・・・・

結果から言えば俺だけ助かつた。

理由は簡単、レアスキルの回復系統だ。超回復で傷の進行及び血の

失血を抑えつつ、瞬間回復で細胞の死を回復していったことだ。さらに入人が死ぬときや生命の危機になると生存本能が働くため、いつもよりも回復が早かつた。

医師が言うには絶対に死ぬ傷だったのに生きており、回復も早い。とのこと、しかし俺を待っていたのは人の嫌な部分であつた。

数日後俺は無事に退院した。お金は口座から引き落としてくれと頼んだいた。だが俺を待っていたのは「」を見るような冷たい目をしている父の弟と母の姉だった…

そこからが大変だった。葬式をやるために準備、それによる遺産の手続き、俺を引き取るかといったことだ。しかしこの内容はひどく嫌なものだった…

「どうするんだよー」この子供…」いつがいると遺産が貰えないじゃないか！」

「大丈夫よ。こんな子供言いくるめれば大丈夫でしょう。」

そう言い父の弟とその妻がしゃべっていた。キモチワルイ。なんでお自分の身内が死んだのに、金の話をしているんだ。また、母の姉も「あなた！子供が残ってるじゃないのー死んだはずじゃないの！」

「知るかよー俺が聞いたら死ぬような大怪我で助からないといわれ

たんだからー」

「なんなのよそれ…人じゃなくて化け物じゃないの…」

「だが、引き取らないと遺産は第一の身内のあの子供にはいるんだぞ。」

「だったら、わざと引き取つて施設にでもいれればいいじゃないのよ。」

と聞こえた。この人たちもキモチワルイ。どうしてこんなことを本人がいる前でいえるんだよ。子供だから分からないうことか。だが、あいにくと中身は子供じやないんでね。

「おい。どうする」の化け物は。誰が引き取るんだよ。」

そう父の弟が言つと、俺の知らない親戚の人気が集まり話し始めた。

「まず、遺産は第一相続者のあの化け物に入る。だから、引き取るのは慎重にしないと。」

「お金は欲しいけど…あんな人じゃない奴誰が引き取るのよ。」

「まつたく、嫌なものまで残していきましたねえ。」

「まつたくだ。」

「じゃあさ。言こぐるめて遺産をあいつ以外の遺族で分けようぜ。」

そう言い終わると母の姉がこちらに来た

「ね～え。僕、両親が死んでつらいのは分かるけれども、遺産つて言つものがあつてね。それを分けたいんだけどもさ。あなた要らないわよねーはい決定！」

と一方的に言られて親戚が集まるところでは、やつたなとか、これで生活が楽になった。とか詩文の都合のいいようにしゃべっている。

ああうるさい。ナンドソンナンタノシソウンシャベツテイルノ？オカシイジャナイカ。ミウチガナクナツタノー…

「う・・ぬれ・・・い」

もうなにがなんだかわからない。もういやだ。こんなところ一刻も早く抜け出したい。しかし

「やうだよーあいつを施設に入れるんぢゃなくて生物研究の被験者モルモットにすればいいんぢゃないか。そつすればかなりの金もはいるぞ。」

「ビ」に入るのよ。」

「薬の被験者や、実験の対象になるところにけばいいんぢゃないか？それにあんな事件なのに生きているのだから有名だる。」

「それもやうね。」

ああもうだめだ。頭が割れるよつにイタイ。前世の体が動かなくなつた時と比にならない位に…

「うるさいんだよー……金がそんなに欲しいならくれてやる……」

だからもう、俺の目の前に一度と現れんじゃねえ！……「

そう親戚どもに言い放った。いやもう親戚でもなんでもないか。た
だの他人。遺産はその手切れ金だと思わせればいい。そう思いなが
ら、公衆電話へ駆け込んだ。

第十話 絶望 憎悪 裏切り 憤怒 3（後書き）

この話をよんでも気分が悪くなつたりした方がいましたら「めんなさい」。

そしてこれは妄想の垂れ流しです。軽く流す感じでお願いします。

書いているとき毎ドラみてたからか…

第十一話 絶望 懲悪 裏切り 憤怒 4（前書き）

やうじてひなつた。そして、原作までいかないといつ。

第十一話 絶望 憎悪 裏切り 憤怒 4

公衆電話に向かつた俺は神への電話をする。

「なんじや。今いとこ何じやが…」「いいから、願い事を言ひつ。「なんじやよ。そんなに怒つて…一回リラックスじやよ。深呼吸、深呼吸。」

そう言われたので深呼吸をする。すー。はー。よし

「で願いなんだが。」

「その前になんで、そんなに怒つているのかが分からん。理由を説明してみるがいい。」

「簡単に言つと、両親が亡くなつた。それで、その親戚たちが嫌になつた。それだけだ。」

「なるほどのう。人の嫌な部分を見たところとか。」

「ああ、そして願いだが…“親戚から俺の記憶を消してくれ”」

「またなんでそんなものを…お主を知つている人がいなくなるんじやぞ?」

「別にかまわない。家に無断で侵入されるよつましだ。」

「それもさうじやな。まあ、わしもわしの息子もお主を知つているからだ。」

「せうこつてくれると助かる。」

「ふむ。では行くぞ……終わつじや。そして話を聞くために
こひりに来てもらひつからな。」

そうこわれると、俺は光に包まれた……

「で、なぜこいつなつたか。詳しく述べてもひつかのお。」

そうこわれたので最高神とオリの前でこれまでのことを話した。山
に行つたことから事故にあつたことまでを……

「大体分かつたんじやが、その親戚は今どうなつてこるんじや?」

「まあ待つてろよ。親父：お、これだこれ。」

そつ言われて見たのはさつきの景色、俺が出たときと何も変わらない。いや、変わっているのは俺がいなくなつたことにより誰が相続するかと云つて呑つてこる。

「なんともまあ……汚いのあ。」

「これが珍しいほつですよ。おれらくかなり遺産があるんだひつ。
なあ坊主。」

「誰が坊主だよ。確かに働いているのに最低限のものしかなかつた

気がします。」

「む。何故そんなに他人事なんじゃ？なあオリよ。」

「それは俺も気になるな。」

「簡単なことですよ。ロードクラウンで自分に暗示をかけたんですよ。」

「あれはかぞりじゃないのか？」

「自分にかけるくらいなら簡単ですよ。だって俺は化け物ですから。」

「

「なあ、おぬす」「あんまり思いつめるなよ。坊主はいつまでも坊主なんだから。復讐や自棄になるなよ。困つたら俺にいつでも念話していいからな。」「ちょ、わしが言いたいことをつてか何でオリと念話できる？」「ありがとう。オリ。」しかも呼び捨て！？何でこんなに親しいの？何？わしつて空気なの？」「

いじけてしまった最高神を慰めるため時間がかかった。そして、最高神の名前オリエアと念話を教えてもらつた。自分名前を息子に教えるとか…と思つた。

第十一話 絶望 憎悪 裏切り 憤怒 4（後書き）

何故こうも悲しい事があるのが主人公だろうか…
しかしこれは、もし最高神のオリエアが主人公に能力をやらなければこんなことにならなかつた。

その前に、主人公が消えたくないといわずにそのまま消えてしまつたら。などとあげればきりのないような事です。簡単に言つと、欲張つたからこうなつたんだと思います。

第十一話 絶望 懲悪 裏切り 憤怒 5（前書き）

そろそろ原作入りしたいなと思つ。今日この日
そして今日テレ東でStrikersが放送される…原作行きたい
よ

第十一話 絶望 憎悪 裏切り 憤怒 5

オリとオリエアの好意？厚意？でお金の心配はないらしい。しかし、新聞を見せてもらひたとき驚いた

「居眠りでの事故！…トラック激突で一家死亡」と書かれていた。

「なぜ、俺は死んだことになつてているんだ。それに相手は一切悪くないとか。」

「簡単なことじやよ。死亡届をあいつらが出したからじや。まあその死亡届もなかつた」とになつてているがのう。」

「まあ、思いつきり心臓を一刺しですからね。仕方ないといえば仕方ないでしょ。それに能力がほんとにチートじゃないすか。死んだ人が生きているとか。」

「そこが最高神クオリティじやよ。願いをひとつ間違いなく反映させる、これがわしの最高神パワーじやよ。」

「クオリティかパワーかどちらかにしろよ。」

「じゃ、クオリティで。」

「ああ、そろそろ帰るわ。じゃあね、また今度。」

「つむ。じゃあ送つてや」「よつと、じゃね~。」なんで…?」

「あいつの太刀は何でも切れんやしこや? 向こうからもこちらに来れるようだし。」

「なんて物をわしは創つて渡したんじや……」

「後悔しても遅いぞ。坊主は能力も武器も使いこなせるよくなつていたからな。」

「こくらか早いんじや……」

「もともとあいつの妄想とか想像だろ。だから使い方も知つているんだろ。」

「そうじやのつ。まああいつの世界は元はアニメじやが、もつ崩壊は始まつていいからのつ。」

「そつちの方が大変だらう。」

「まあ、これも楽しみじやから仕方あるまい。それに、あそこをただの一次元だと思つていい奴らより、現実を見ているあいつの方が楽しいし。」

「それもそうだな。」

「血や~

「さてと、どうしたものか。氣づいたらもう、来年小学校だからな

あ。」

そう、ここで運命が決まるのだ。私立聖祥大学付属小学校に行くか。
それとも別のところに行くかだ。だが、親は私立のエスカレーター
の方がいいとか行ってたしな。ということは、あの遺産は俺の学費
？…あ、なみだてきた。ヤバイ、マジ泣きそう。

「しばらくお待ちください

よし、落ち着いた。まあ紹介文見みたいなのに共学と書いてあった。
まあオリエアが行っていた崩壊が始まっているんだろうから。仕方
がない。とりあえず疲れた。もつ寝よう。

こうして俺の人生が変わった出来事が終わった。

俺は…

普通の毎日がいとも簡単に消えることに“絶望”し

簡単に日常が消えてしまうことに“憎悪”し

手のひらを返すように消えていくことに“裏切り”を感じ

自分自身の行動や身勝手で消えることに“憤怒”を感じた

結局、これらも自分勝手なことなのだから仕方ないといえばそれで
終わりなのだろう。

第十一話 絶望 憎悪 裏切り 憤怒 5（後書き）

ひとつ原作と違つたことが出てきました。そして一区切りが終つました。

これで原作に進める。

第十二話 代償（前書き）

とうあえず投稿

注この作品は妄想の垂れ流しです。
だから細かいことは気にしないでください。

第十二話 代償

全てのものに代償がある。

それは、物を買つときにお金を払つよう。

それは、浮氣をした後の離婚だつたり。

それは、大きな力を手に入れた事ですべてのものが大きく変わつた
り。

あげればきりのないような事だ。

「おい。化け物が来たぞ。」

この言葉を聞いたのは何回だらつか?百回?十回?いやもつともく
だらう。

何故こう呼ばれるのか。理由は

事故で死ぬような怪我で生き残つたからだ。

どうやら、園のまつには死んだという情報が流れたようだ。だから化け物と呼ばれるんだろう。

これは、仕方がない…

だが、命を狙われるのは別件だろう。

あんな新聞にも載るようなことだったし死亡と扱われていたことから転生者と思われる方から攻撃を受けていた。

まあ、とても弱いものばかりだからな。オリよりも弱い。というより能力のみに頼っているし、同じ能力の人もたくさん来ている。そもそも固有結界とか心象風景を現実に出すものだろう。だから、使った奴らは驚いていた。

だって、何もない場所なんだぜ。^{アンリミテッドフレイドワークス}ひとつのももないただ広いだけの空間。使った奴らはなぜ無限の剣製じやないんだ。とか言ってたかな？

まあ人の噂も七十五日と言われるものだし。まあ無視だな。とこのような毎日を繰り返していた。

幼稚園に行き、家に帰り、ご飯作って、転生者が来たら撃退して、寝る。

この毎日を繰り返す。まあオリとオリエアとの会話は楽しいからいいけれども。

ある日森に行つた。

とりあえず毎日の日課になってしまっている練習をする。

え？ 戦闘狂じやないですよ？

イヤイヤ、本当に。戦うのも嫌だし痛いのも嫌なんで渋々やっていますし。

できるなら、戦わずに生活出来たらと思いますも。

「封血結界七重式」

とまあ毎回このよつたな結界を張る。

封時結界と変わらないが違うところは魔力を使わないところか。魔力の代わりに名の通り血を使っている。七重なのは、一枚だとすぐ壊れるからだ。七重ぐらいがちょうどいい。名が痛いのは仕方ない。

「今日もぼちぼち頑張りますかね。」

そう言い、太刀と小太刀を構える。相手はオリと瓜二つの人形だ。簡単に言うと自分に暗示をかけて見えるようにしている。痛覚などの感覚もリンクしているから現実的に戦える。

太刀を思いっきり振ると空間¹⁰と引き裂く。やっぱりありえない能力だなあと思いつつ戦う。

幻覚なので絶対に倒れない。やっぱり新技使おうかな。と考えているが技が思いつかない。

そんなことを考えていると攻撃を食らう。その瞬間俺は意識が落ちた。

気づくとそこには大きな自然に囲まれた森だった・・・・。
はい。気絶していただけです。結界も壊れてないし一人で新技でも開発しようかな。

創造力で出来ぬもの無し！――！

といったが中々うまくいかないんだなこれが。まあ太刀一振りであ

たれば一撃で基本沈むからいいかな。そんな事思つていた時俺にもありました。

でも新技だよ？カツコい技でも地味な技でもいいからバリエーションを増やしたいんだよ。

何で振り回しているだけで相手が引き裂かれるんだよ。もつと業が欲しいよ。

と考えて、ここにある茂みが揺れた。

ビクッと肩どころか全身で表現した俺は悪くない。だってここは結界の中だ。出て行くことは出来ても入つてくることは不可能なんだから

「アハハ。ジヨーダンキツイデース。」

なぜかこう喋ることしか出来なかつた。まだがさがさと揺れている。これはポケットなモンスター見たいなエンカウントか、それとも竜の探求みたいなエンカウントか。

前者なら捕まえるか逃げればいい。

だが後者の場合は戦うしかない。俺はモンスター・マスターでも魔物使いでもないからな。

とつあえず覗いて見よ。そう結論を熱い脳内会議の末出した。

「逃げちやだめだよなあ。」

そう呟き覗く。テレテレとエンカウントの音が聞こえるかと思つたら聞こえなかつた。

いたのは狐。怪我をしている。

まあ治してやるか。そう思い怪我を治してあげた。

第十二話 代償（後書き）

竜の探求、ポケットなモンスターわかりますよね？
狐は作者の好きな動物です。

第十四話 助けたからって良い事があるわけじゃない（前書き）

まさか全部消えるとか…ないわあ

第十四話 助けたからって良い事があるわけじゃない

あらすじ

怪我をしている狐がいる。どうする？ 助ける

助けない

とりあえず怪我をしてるので治してあげるか。それに新技の対象になつてもらおう。

怪我をしている部分は前足の右、体の背中に切られたような傷、そしてべつたりと血の着いたし・・っぽが・・・つてアレ？オカシイナナンデシツポガココノツモアルンダ？マダゲンカクヲトイティナイインダッケ？つて現実逃避はやめよう。

早くしないとモフモフとした尻尾が血でべつたりで駄目になつてしまつ。

「手をかざしてっと。」

そう呟き傷に手をかざす。そつするとあら不思議！ 傷どこのか血までが消えました。

「ぐおお・・・・いて。」

この技の欠点は、傷を自分に移し変えること。だからこのよつた場合は自分の右手から血がだらだらと出でおり、背中は焼けるように痛い。尻尾はないが足の方がものすごく痛い。

おい。回復系統の能力仕事しろよ。このまま行くと天に召されるだ。

「あー。服が血まみれだよ。」

とても血の臭いが半端ない。生臭いと言つがなんといつが…そんなことを思つと田を覚ましたようだ。

「む。誰じや。」

おおひ。すげえ睨んでらつしゃる。怖い怖い。

「自分から名乗るのが礼儀じやないですか。」

まあ名乗るときは自分からの方が何かといっし

「私は世界の管理者じやが…お主は何故笑つておる。」

「いやあそんな喋りをする知り合いがいるもんで。」

「その知り合」とは誰じや?」

「最高神と言つていたオリエアといつ方ですよ。」

頭をよきつたのは最高神と名乗つっていたオリエアだ。その前にセカイノカンリシャと書つて葉が…

「ああ、あいつか。いつもミスばかりしており、アニメとゲームが大好きな引きこもりか・・・で、なぜそいつを知つておる。」

まあ世界の管理者は、オリエアより上の存在だしこの人も上方絡みだし、本当の事いつか

「転生者ですよ。」

そう言つと田が変わつた。憎しみや侮蔑の籠つた冷たい印象の残る目で睨まれる。俺はMじゃないからなんにも感じないが可愛いと思つてしまつた。

「なぜ、転生者が私を助けるへんかわと殺せばいいだらう。」

「話の内容がつかめない。だから誰か状況が分かるよつて説明プリーズ。」

「なんで、私を殺そうとしたのに助けるといつているのか。と聞いているだけだ。」

「殺そうとするわけないじやないです。とりあえずあそこで覗いている奴は切り捨ててOKですか？」

「お主見えるのか？」

「化け物なんて名前で呼ばれてるんですけど、これぐらい出来ないと。」

「そりか…なら私の味方といつのならあいつを追つ払つてくれ。話はその後じや。」

「りょーかい」

そう言つと思い切りそこまで文字じうじう跳んだそして落下來する勢いのまま木刀を振り下ろす。「ゴスッ」と鈍い音がした。あつけない…そう思つと後ろから鎖が飛んできた。

「アブねえなあ。」

「何故よけられる。死角から襲つたのに……」

「化け物なめるんじやねえと言つことだよ。」

そう言い終わると同時に太刀で斬つた。もちろんその周囲の空間ごと切り裂いたよ？今頃どこか遠くの異世界だろ？

「ほい。終わつたぞ。」

「なんともまあ、ぶつ壊れた能力で。」

「仕方ない。厨二病とか言われる思春期特有の考え方だから。」

「そうか……」

そりやこんな馬鹿みたいな能力みたら驚き通り越して呆れるよなあ。

そして話を聞いていると子供を預かることになつた。ビックリつになつた。

第十四話 助けたからって良い事があるわけじゃない（後書き）

馴文だし書きたいことが書けない

1 / 5 追記 全部終わつたので更新を早めます

第十五話 迷走する本文（前書き）

書きたい」と詰め込んだらす「」こと云。でも短い。

第十五話 迷走する本文

あらすじ

世界の管理者から話を聞いたたら子供を預かること……なぜだ

「なぜ、管理者の子供を預かるんですか？俺マダ五歳来年小学生。

OK？」

「大丈夫、中身は大人だろ？？」

「いや、でも……」

「四の五の言つな！男なら子供ぐらいで育て上げられるだろ？。なんだ？動物に欲情でもするのか？」

「それって人としてアウトじゃ……あ、俺って化け物じゃん。」

「なら問題ない。」

「問題大有りですって行つちゃたよ。どうしきつていうんだよ……」

「小さい狐を置いて親の狐はどこかへ行つてしまつたとや。とかどこの昔話だよ。」

「帰るか。」

小さい狐を手にしたまま帰る準備をした。

（帰り道）

ふと公園を見てみる。

泣いている子の周りに色とりどりの髪をした子が囮んでいる。シユールな光景だ。一人の子を金だと銀、それに赤、青、黒などといった人たちが囮むとか。

「俺だつたら泣くだろ? うなあ。」

そう呟き帰り道の方に歩いていく。

だって知らない奴に囮まれた拳句、話しかけられるとか泣くじるかトライア物だよ。

そつ思い、心の中で合掌した。名も知らない子よ、ご愁傷様。

そして、俺は小学生になった。飛ばしすぎ? そんな事ない。

第十五話　迷走する本文（後書き）

崩壊します。何もかも。

そして次は原作前の主人公紹介

紹介文　え？これつている？（前書き）

とりあえず原作突入前の馬鹿すぎる能力の数々と主人公紹介

紹介文 え？これつている？

主人公

見た目 黒い髪で一般的 顔は下の上とか中の下など普通の人と変わらない 印象に残りにくい

性格 基本駄目な奴 でも動物や化け物などと呼ばれるものには眞面目に対応する

説明 もう一十五回もやっているのに名前が出てこない主人公。原因不明の病で死んだ後に転生する。そのときの顔はとても笑顔だった。なぜなら、助かると思ったから。能力は本当に異常なほどすごい。これも想像力の力のおかげ。本人は痛いことが嫌い。魔力がないから何かで代わりをしようと考えていたら、欲と血で代用できるんじゃね？と思つたらできた。このことはいつか説明予定。

武器

魔王の太刀

能力 何でも切れる。たとえ空間、だろうと結界だろうと魔法だろうと切れる。ただし思い（想い）が弱いと能力もそれに応じて弱くなる。しかし弱くなつても強い。本人が成長すると大きさもいい感じな長さになる。とても軽い。ただし、他の人が使おうとすると拒絶反応で痛みが走る。

魔王の小太刀

能力　如何なる物からも守る。というよりも太刀と相反するもの。やはりこちらも思い（想い）が弱いと守りが弱くなる。しかし弱くても強い。本人が成長すると大きさもいい感じな長さになる。とても軽い。ただし、他の人が使おうとすると拒絶反応で痛みが走る。

木刀 暁

能力　御神木から作られた木刀。太刀と小太刀の能力を半分ずつ使えるようなもの。ただし、特殊能力はない。不殺の為にあるが切れ味はすごい。基本これと小太刀で戦う。

希少技能 レアスキル

創造力

能力　想像つまり頭で考えたことを現実に出すことが出来る。この能力が基本であり、この能力で武器や他のレアスキルが出来た。デメリットは魔力を使うことだが、血と欲で代用できるようにした。

魔王の鎧

能力　すべてを反射させる鎧というよりもバリアのほうが近い。範囲は魔力によって変わる。見えないので相手からしたら驚く。見えるようにすると、バリアジャケットのように黒く全身が隠せるようなフード付きコートが出る。

ロードクラウン

能力　別名　魔王の王冠と呼ばれるもの。強い暗示や催眠効果を持つ。魔力でのみ動くため代用は出来ない。しかし自分自身にかけることは可能。

瞬間回復・超回復

能力　これさえあれば普通の傷ならすぐに治る。デメリット無し。

技

意志の剣

能力 簡単に言うと射撃形の魔法。一回で十本しか操作できない。しかし、操作せずにそれぞれの剣の意志で動かせばかなりの量を出せる。代償は魔力か欲。意志というより欲のほうが合っている。

瞬間回復 対人用

能力 自分以外の人の傷を治す。代償は自分がその傷を負うこと。

紹介文　え？これつている？（後書き）

妄想の垂れ流しつて素晴らしい。ちなみに神からの貰った能力は書いてありません

第十六話 原作突入…つて俺原作知らねえ 前編（前書き）

時間軸が飛びました。悪いのは俺じゃない！俺の文才が無くしかも
書きたいことを書くからいけないんだ！
ただの言い訳です。

第十六話 原作突入…つて俺原作知らねえ 前編

あらすじ

とりあえず小学生になつた。

小学生になつたのは良いが、私立聖祥大学付属小学校つて白い制服なんだよな。汚れが目立つからつらいが仕方ない。

とりあえず、オリエアに言われた話と違うところがある。

ひとつ、なぜか全て共学になつてゐる。

ふたつ、中学になると制服が男が黒い制服になる。女子はそのまま。みつつ、学力が足りないとアウトらしい。

三つ目が一番深刻な問題だ。小、中と大丈夫だが高、大とか内容が分かるわけがない。前世でも中学三年までしか病院で勉強してないし、私立だから応用とか・・・まあ無理な場合は最悪退学かな？ とりあえず現状確認。

小学一、二年と勉強は問題ない。寧ろ今年の三年がきついオリ曰く、運命が決まるとか。

修行は毎回続いている。魔法関連はからつきし駄目だ。使えるのはあの結界だけだ。あの結界も七重が七十に変わつたし。

あの管理者の子は元気に育つてます。というか流石に管理者の娘じやなかつた。

魔力保持が俺より上とか・・・

それに娘といったが活発に動き回る。そして人の姿にもなる。やはり管理者の娘だつた。

でも尻尾はモフモフで気持ちいい。尻尾に悪は無い！

よくてお転婆ということだらう。母はあんなに静かだつたのに・・・家のものを人の姿で壊すのも毎日のことだ。ホントどうしてこうなつた。

何？修行の時に連れて行つたのが悪いの？あ・・・涙が・・・

とまあ長い感傷に浸つてゐる場合じゃなかつた。

学校は地獄だ。それだけはいえる。

化け物と言われるのには慣れたが、こうみんな髪の毛がカラフルなんです。赤から黒まで、クレヨンとか絵の具並みに種類豊富なんですよ。前世だと黒か茶だったし。

とりあえず、弁当を作りバックにいれる。

「んー。なにしてるの？」

おつと、破壊神のお目覚めか

「今失礼なこと考えてなかつた？」

怒りマークが見えるくらいに怒つてうらしある。まだ俺より年下なはずなのに俺ぐらこにしゃべれる。

「どうでもいいから、早く顔洗つてこい。それと、狐状態になつておけ。」

「むー。どうして？こっちの方が楽なのに・・・」

「その姿だと連れて行けないだろ。」

実際、動物持ち込み禁止だがそこは抜かりなし。あいつが自分自身にステルスを掛けるからだ。

実際俺と手合わせしたときに全くと言つて良いほど見えなかつた。彼女曰く神通力だそうだ。まあ魔王の鎧張つて待つてれば自滅するんだけどね。

「せひ食べるだ。」

「いただきます。」

「ちよ、早いつて。」

「食べたもん勝ちだもん。」

そういうつつ食べ進めていく。

料理は父が教えてくれたものとレシピ、それに調理器具もある。だから、簡単に作れるのだ。

「1」馳走様。」

そつに、やつむと歯を磨き制服に着替える。これで四、五着目だわ。全くじめと言つものはこいつになつてもきつこねえ。

「わいと行くだ。」

「まつてよお。」

「だが断る。」

そういう、ドアを開ける。後ろからタックルを食ひのひの毎回のことでだから慣れた。いやあ慣れって怖いよ。

うん。狐状態、俺にステルスは効かなくなつていて。そんな何回も見せ付けられたら化け物としての能力で解析できるわけで。

「じゃ、行くか。」

こんな感じで毎日を過ごしている。
変わらない毎日だ。
だが、これが壊れるのを俺は知っている。
いつでも終わりは簡単にくるのだから。

第十六話 原作突入…って俺原作知らねえ 前編（後書き）

からつきしつて茨城弁なんですね。知らなかつた

第十七話 原作突入…って俺原作知らねえ 後編（前書き）

原作と言つても少し触れるくらいですかね。

第十七話 原作突入…って俺原作知らねえ 後編

徒步で学校へ向かう。こっちの方がいいし、バスとか乗ると酔うので徒步が一番だ。

（登校中）

ああやっぱでかいなあ、この学校。

流石、私立だと思う。しかも、とにかくひ違つ。流石パラレルワールドあつさり崩壊してゐるぜ。

『そんな事考へてる場合じゃないでしょ。早くクラス分け見ないと』

そんなことを念話で伝えてくる。それぐらい分かつてゐるよ。

「えっと…小澤、小澤つと。」

一組だ…マジか。ここって転生者たぐさん居るじゃん。といつよりも俺とその他の男子全員なんだが…

げ…29番 高町つて書いてあるよ…

オワタ…樂に原作に入らないよつて今まで別のクラスだったのに…・・・最悪だ。

ほら、みんな可笑しいって。

地面上手を着き。これになつてる人と、何か悟りを開いたような人と、すごい嬉しそうな顔をしてダラッシャーーーと叫ぶもの。どうやら、一組に入れたものと入れなかつた人の温度差が激しすぎる。

そもそも、何百と言う人がここに来て落ちていったもんなあ。

初めて小学校受験とか受けたよ。簡単だつたが。

とりあえず5～6クラスの一クラス40～50と書つても多い数のだから、そう落ち込まなくても。

教室に来ると空気がヤバイ。

どれぐらいヤバイかといつと空気ピリピリ。全体どよーん。そしてそわそわそつつ、目がギラギラと擬音を使つくります。戦争でも始めるのかと言つ位の氣合の入りようだ。何故そんなに氣合が入るのか不思議だと思つ。

とうあえず自分の席を探す、一番後ろの窓際だ。一番好きな場所なんだよなあ

ガララッとも音が聞こえた。そこを見ると金、紫、茶色みたいな髪をした三人組が入ってきた。

そして、男子全員そこを見る。それは、ガバッといつスピーディ。

「はい、それでは自己紹介していきましょう。」

先生がそういう。しかし、これって必要か?と迷ってしまつ俺は協調性が無いのだろうか。

そんなこと考へていると俺の番に

「小澤有弥です。よろしくおねがいします。」

名前だけ言つていればいいだろ。口ひこひの苦手なんだよ。

『なんでもつと言わないの?』

『面倒だから』

念話で話しかけるなよ。

そして首絞めるな。息できなくなるだろ。首に巻きつかせたのは失敗だな。そう思つ。

そして今日は無事に過げた。平和万歳!

第十七話 原作突入…って俺原作知らねえ 後編（後書き）

やつと名前が出てきた。長かった。

何故この名前か？

苗字はテレビでちらつと見えたから。

名前は外を見たら夕焼けで童謡でゆづやけのゆづやで切れてたからです。

しかし夕焼け関係ない名前といつ。

そして原作は何一つ残らなくなるといつ崩壊やつぱり妄想の垂れ流しだね！

第十八話 ジュエルシードってマジかよ…（前書き）

やつぱり文才欲しい。
そしてまた時間が飛ぶ

第十八話 ジュエルシードってマジかよ…

あらすじ

原作？それって何？

かなりの日にはちが過ぎた。
その日はみんな（転生者）はそわそわしていた。
なぜだ？

あるものは気持ち悪いほどの笑顔を浮かべ
あるものはぶつぶつと独り言を言つ
あるものはデバイスと思われるものに向かつてしゃべりかけている
あるものは関係ないという感じでいつも道理の人。

俺は四番田だと思つ。

それと、子狐の名前はそのまま九尾にしました。ネームセンスなんてありませんし。

そして、今日から自由散策をせてあげることにした。まあ学校つまらないと言われるのも面倒だったし。

「みんなは将来どんなおじいさんにつきたいですか。」

先生が言った。

将来か。考えるのも面倒だなあ。今は九尾を育てるのに精一杯だし
…やつぱり、サラリーマンかな。

現実的に考えるともっと他のものあると思つが今は「れぐりいだろ
う。

キーンローンとお馴染みの鐘がなる。

「セツーフ、れい、ちやくせーせ。」

「ねえ、高町さん。一緒にお昼飯食べない？」

毎回これもお馴染みの光景だ。たしか、聖祥美女だけ？そんな感じで呼ばれているためにお昼はこのように人が集まつてくる。毎回よくもまあめげずにトライするよなあ。

そつ思いながら屋上のタンク近くに行くため行動する。しかし…

「おー。ビリ行こうとしてるんだよ。」

呼び止められた。何だよ、こいつちは腹減ってるんだから。

「何だよ。高尾。」

少しここりしながら聞く。すると

「お前いつも一人で食べてるよなあ？俺と一緒に食べないか？」

どの口が言うんだよ。いつもお前にじめていたじゃないか。

今は止まっているが昔はひどかった。

物が隠されたり、物が壊されたり、一番は制服がぼろぼろになっこことだよなあ。

と昔の思い出に浸る。おつと いけないいけない。返事はもううん

「うーん。俺って化け物だから一緒に食えないや。」

逃げた。簡単に言つとどうしていじめていた奴の顔を見ながら飯を食わなきゃ行けないんだよ。

クラスの女子からは非難の目線を感じる。

そりゃ、カッコいいから女子からしたらうらやましいのだろうが、こちらはあいにくと心は狭いので食べれない。

「何だよ……まあいつでも相談にのるからな！」

ポイントでも稼いでいるのか？あにつけ。ここはゲームでも一次でもないぞ。現実だぞ。

その前にどの口が言うんだよ。ちなみにいじめは気づかないようになっていた。流石に結界の中で殴る、蹴るを受けるとは思わなかつた。きついのは肉体ダメージが残ることだったかな？回復を気づかれないようにするのが大変だった。

「ああ、鬱になる。飯がおいしくなくなるから考えるのやめだ。」

屋上に来る。よし、誰も居ない。これならと跳んでタンクの近くに行く。ホント化け物だよな。

人の声がたくさん聞こえてくる。そりゃ屋上だもの、くるよなあ。

そんな感じで一日が終わる。

だが今日はこの後、嫌なこと。一部の人は狂喜乱舞するアイテムを九尾は持つてくるのだ。

「で、この青い色した宝石みたいのつてもしかしながら…」

「うん…ジュエルシードだよ。」

馬鹿か…。なんでそんな物騒なものもつてくるんだ！

第十八話 ジュエルシードってマジかよ…（後書き）

ギリギリになつた。ほんとギリギリになつた。

第十八話 スピードタイプには防戦が一番（前書き）

タイトルは関係ないと思っています

第十八話 スピードタイプには防戦が一番

あらすじ

九尾が厄介事を持ち込んできた……あ、胃が痛い

「……わざと元の場所に返してきなさい。」

かなりいろいろしている。泣きそうになっている。一部の人はこれを見て楽しく思うのだろうが俺は思わない。多かれ少なかれ俺が喜ぶと思ったのだろう。

「だ・・・だつて・・・」これがあれば……願いが叶うんだよ?」

神龍でも呼ぶのか?九個も持つてきやがって。

「なぜ九個なんだ?怒らないから説明して?」

「私の尻尾と同じ数だよ・・・」

なんで最後だんまりする。

「でど」から取ってきた?」

「森で3つ、海の浜辺でかもめから2つ、町の公園の砂場で1つ、家庭庭に1つ、残りは貰った。」

「誰に貰つたんだよ・・・」

「知らないおじさん。」

「ハイ。アウト——————」

知らなごおじさんよ。なにやつてるんだ。

「でも。話を聞いてくれたらこねあげのって言われたことと、孫に似ているところられて貰つたよ?」

よかつた。何もされてないのか…それなら怒ることも無いかな?

「よかつたあ。何かされたのかとか思つたよ。」

「心配してたの?」

「当たり前でしょ。親が子の心配をしない訳が無い。」

実際、奇麗事だがお願ひされたので引き受けただけだが…あの人故居ないと転生できなかつたわけで…

「えへへ。ありがと!」

そう言われた。なぜ謝る。そしてなぜ顔を赤らめる。

おかしい。俺は親代わりだが年齢的には変わらないはず…これがうわさのファザコンと呼ばれるものか…

まずい。このままだと、てそれは無いよなあ。ええない奴に誰が惚れるんだよ。

俺は一生独身を貫くんだ! 恋人なんぞいらん! ハーレムもいらん! いるのは心の癒しだけだ!

強がりをいつ。もちろん心の中でだよ。

ジユノルシーーは、ゼン上院議員のことをもつた。
だって触ると危なそうだし…

第十八話 スピードタイプには防戦が一番（後書き）

はいはい崩壊崩壊。

九個とか二十一個あるうちの九個とか…

九尾は主人公が喜ぶと思って持ってきたわけであり、悪意は無い。
どこかの最高神とは大違いですね。

第十九話 防戦しても手数で圧倒されると不利になる（前書き）

またタイトル関係なしといつ

第十九話 防戦しても手数で圧倒されると不利になる

あらすじ

九尾の善意に泣きそうになりました。

「で、れどしうつか。」

これとはもちろんジュエルシードである。

原作知つてれば対処できたのに、基礎しか教わらなかつたからな…
つてそうだよ！最高神のところに行けばいいじゃないか！！

「九尾行くぞ。」

「ど、ど、ど。」

「最高神のところだよ。」

「くわつ。なんでい」ところでガードするんじゃ！オートガードが
憎いー。じゃが…見えるー見るぞー…わしがこやつに勝つところが
…！」

「ハイビーン。」

そういう、コンセントを引きちぎつた。このとき抜いたのではなく引
きちぎつた。だから・・・・・

「うふなこするごひや。コンセント……がつてええええええええ。

」

「うつなる。

「なんでコンセントがッ。返せー。コンセントを返せええええ。

「ほい。」

「ピタシのコンセントじゃないわー。」のゲーム機のコンセントじや。

」

「じゃあ九尾よひじべ。」

「わかつたー。」

「つて管理者様！ナントこんなに小さくなつて・・・・・・まさかお前幼女好「違えよつと。」ああ一本体が・・・・粉々に・・・・もつ・・・わし・・・燃え尽きたよ・・・・・」

そういう明田のジロー状態になつてゐる。

「もつてあたよーつてひしたの？」

「あつと悪ご夢でも見たんだよ・・・・・・悪い夢をね・・・・・

「やつかー。でこねえりあむへ。」

「思に切つぶつかへやれ。」

九尾に言つと思い切り最高神にぶつけた。

「ゴスツと鈍い音がして倒れた。それはもう推理小説ばり。

「じゅうへお待ちください」と

「いたた。で用件は?」

「これどうすればここと連絡?..」

「わつわと並んでる。もじへは海へアーンじゃな。」

「よつ。お前を海にてんじや。」

「や。」

「そつこ、最高神を持ち海へ連れて行くために地球へ・・・

「分かつた。分かつたからおひじてくれ。腰が痛いんじや。」

「よじおひじですか。1 - 2 - 3」

思い切り床にたたきつけた。ゴキッと言つ嫌な音が耳だらけ。

「イタイ。わしの心がイタイ。」

「真面目に答えないのが悪い。」

「スマンのア。でやひひ面のまほじゅうトス!!マヤンだから
の手にある鉗下りしてくだせ。」

「うるさいな。どうするか聞いたんだ。シビれとかあこがれとかい

「ほへ。じつはスミマセン刺さります。先端刺さるから。痛い。痛い。」

「眞面目に聞け。で一時的に預かっている。」

「幼女好きか。知らなかつたんじゃが・・・・」

「一回死ぬか?」

「スマミセン。」

「つあえず、話した。何故預かる」とになつたか。ジュエルシードのこと。

「なるほど。命が狙われているから危険にあわせたくないといふ母としての願いか。」

「わづなりますねえ。」

「で、ジュエルシードじやが九個つて阿呆か。一田で九個とか。」

「セレガ、おかしいんですね。一田とか、あんた聞いたとき一田ひとつでもきつとか言つてたし。」

「流石、管理者の娘! わしにできない事を平然とやつてのけるッ! そこにシビれる! あこがれるウー!」

「うるさいな。どうするか聞いたんだ。シビれとかあこがれとかい

いから。」「

「簡単に言えば“ど”に渡すかじやな。1　なのは、2　フヒイト、
3　アースラ、4　フレシアどれにする？オススメは2か4じやな。
」

「どうせ原作ブレイクしたいだけだろ。1は他の転生者に睨まれる
からバス、2も同じ理由、3は確実に捕まる、4は何か怖い、だか
ら俺は5の自分で持つてるを選ぶぜ！」

「馬鹿がお主は！持つていたら逮捕されて3のときより危険じやよ。
それでもいいのか？」

「悪用しなければ大丈夫だつて。それにござとなつたらそれを取引
材料として逃げるから。」

「じゃあ何でここに来たんじやよ。来なくともよかつたのに。」

「暇だし、相談してから決めよつと思つた。それに久しぶりにここ
に来たかつたし。」

「お主・・・いい奴じやな。」

「まあ偶に会つてゐるよ。じゃね。ほら九尾帰るわ。」

「氣をつかるんじや。お主が進む未来は一番きつこと思ひ。頑張
るんじや。」

「分かつてゐつて。オリにもようこくへ書つておこでくれよ。」

「「つむ。 返えておくれよ。」

「「ぱーじぱーい。」

「「つむ。 九尾ちやんも氣をつけたの。」

「「うん。」

これからの方針は決まった、第四勢力として行こうか。

第十九話 防戦しても手数で圧倒されると不利になる（後書き）

第四勢力と言うのは、1がアースラ組み、2がテスター・サ組み、3が転生者組みなので4の化け物組みといふことです。化け物とか出てくるのだろうか？

第一十話 気がへとんぼは知らない所で…（前書き）

いやや書いてるときって年末の大晦日なんだぜ。

第一十話 気づくとやうは知らない所で…

あらすじ

新しい勢力として生きていくんだぜ！

「どうしてこうなった。」

現在俺が居るのは、アースラの中。どうしてこうなったか思い出してみよう・・・・・。

あのあと帰ってきたら驚いた。時間の進みが速かったのだ。その時間おおよそ4～5日。

まずい。そう思った時には時すでに遅し。

終わっていたことをあげると旅館の所。テスター・ロッサさんとの戦いだつけ・どうなったのだろうか。

町の中での強制発動。

これぐらいが神から聞いた所だろう。

関係なし。興味なし。といえないんだよねえ。

全く、関係するということはめんどくさい事なのに…

「何故公園で遊んでいたら木が大きくなるんだよ。だれか説明プライズ。」

と思ったら結界が張られた。まあ当たり前だろうね。その間に木はじんめんじゅ見たいになってるし、と思ったら後ろに誰かいた。白い服装に杖を持ったツインテールの人。げ、高町だ。

ステルスで姿を消しつつ隠れる。

杖でじんめんじゅにホームラン予告とか…

そう思つていたら上から金色の魔力弾が飛んできた。
しかじんめんじゅはガードする。堅いなあれ。といふか他の転生者はどうした？普通ぐるだらけ。

「オオオオオオオオオオ」

叫ぶなじんめんじゅよ。うぬせ。

ほら九尾泣きそうじゅんか。泣かしたらここからぶつた斬つてやる。
なんかあちらで、オレンジっぽい狼？みたいなのと金髪マントさん
が喋つてる。おそらくバリアのことだらけ。

ちょ、戦つてるとき他の所見るとか馬鹿なのか？ほらハードブリントみたいに出したじやないか。

もう、九尾がフルブルふるえて服の一部を強く握つてゐよ。可愛い
なあ。

杖つてしゃべるんだー知らなかつた。それに空を飛ぶとか、魔法つ
てすげー

つてかなんでお一方はやる気満々なんですか？

なんで斬撃飛ばしてるんですか。それに高町さんどうして杖を構え
てるんでしょうか。

ちょっとなんだよアレーおかしいだろ。レーザーのよつなもので出
てるつて。

ほら泣きやうなんだつて、九尾泣くな耐えるんだ。

そしてレーザーによりめり込むじんめんじゅ。見ると可哀想にな
つてきた。

おいおい一人掛けでレーザーとか酷すぎるだらけ。
じんめんじゅが光つてゐつて。

なんだ？進化でもするのかよ。と思つていた時がありました。
出てきたのはジユエルシードですね。

うおっまぶし。

とつあえず、泣かずにすんだな。めでたしめでたしだな。

だが運命はいつでも残酷なんだといつことだけは言つておひつ。

二人がいつの間にかぶつかり合つ直前、眩しい閃光と魔方陣からそ
いつはやつてきた。

「ストップだ！」

そう言い、一人の杖を受け止める誰かがしてきた

「！」での戦闘行動は危険すぎる。」

いや、九尾が泣いたときの方が危険だからね？たぶん俺でも抑えら
れないよ。

「時空管理局執務官クロノ・ハラオウンだ。詳しい事情を聞かせて
もらおうか。」

「う・・う・・うう・・・・」

やばい泣く、泣いてしまひ。

「うわああああああああん

泣いちゃったよ。まづい。

「誰だ！」

「誰だじゃねえよ！九尾泣かしたのてめえだろ？が」

そういうと同時に太刀に思い切り怒りという欲を籠める。

「どこかにきえされえええ」

そういう思いつきり太刀を振るう。

あの馬鹿はそんな所から何してるんだといわんばかりに動かない。
だが、それが命取りだ。

「「え」」

そう杖を受け止められていた二人が言つ。なぜならば・・・

そこに居たはずの馬鹿が消えていたからだ。

第一十話 気がへとむけは知らない所で…（後書き）

所々疑問なのはあまり深く知らないからです。
そして次回に続くといつ。

第一十一話 やつたことは仕方ない。その後どうあるかが問題だ（前書き）

前回一方的な地の文だったのは見ていたときに次々色々なことが起きたからです。

第一十一話 やつたことは仕方ない。その後どうあるかが問題だ

あらすじ

九尾を泣かした馬鹿を空間」と引き裂きどこかに飛ばしました。

「ほらほら泣くなよ。九尾さんお願ひしますから。何でも言ひ」と
聞くから。」

何度もこういったか。あいつを何処かに飛ばしてからだから數十回は
言っているだろう。

その間、二人の魔法使いと一匹の狼?それにフェレットと呼ばれる
ものは硬直していた。

なぜなら、目の前に居たものが一瞬で消えたからだ。
その頃のアースラ内部でも沈黙と硬直が続いていた…

「泣き止んでくれ。ホントに。何でもするから。」

そのとき、九尾が泣き止んでくれた。しかし「タア」という擬音が聞
こえてくるような笑みを浮かべて

「じゃあ、一緒に寝て! 独りは嫌なの!だから一緒に寝て!」

「それぐらいなら大丈夫だわ。良いよ。」

子煩惱? 親馬鹿? 可愛い娘のために必死になる事の何が悪い!
でも、見た感じ8歳の子供が4歳程度の子供にくくにくくするとか…
・・・

～その工場のアースラ内部～

「急いで彼の行方を捜して。」

「ばたばたと忙しなかつたところ。

～海鳴臨海公園～

「みんな帰けりむつに帰るつが。」

「やうだねえ。」

「すいへにやけながら返答する九尾。 やっぱり可愛いなあ。

「おひと。 その前にあの馬鹿回収しないと……。」

あの馬鹿とは大事な九尾を泣かした奴だ。 回収しないと何処か遠くに行っちゃうからな

～じまらへ待ちださ～

よし、何とか見つかった。 でもどうしようか…

「ねえねえ見て見て、 ジュエルシード～」

「おこ馬鹿ー持つてくるな持つてくると……あひあ！」

金髪マントの奴来たじゃんか！ しかも杖が鎌になるとかどうするんだよ。

「それをこじらせて渡して。」

「渡せないと…………」

いや、渡さなことどうなるんですか？そして狼喋つてゐる。あ、九尾も喋るか。

「分かりました。じゃあどう」「あげないよー。」うええええええ、ちよ、これ九尾いらなものだから！九個で十分だから、やこにいる子に渡しなさいー。」

「渡しちゃうの？」

泣き声でこじらせて聞いてくる。カワコス……つてそんな場合じやないよな。

相手をん殺る気満々だし。腹くくるかねえ。

「よし、ならば俺のバリア破れたらって話聞けよ。」

「バルディッシュ」

「yes - sir.」

いやいやイースでもサーでもないから。

「ちよ何で突撃してくるの？痛い、痛い九尾首絞めるな。」

はつかり言おひ。これ破れることって無いんだよな。流石に魔王の名は伊達じやないと叫づ。

「光の玉でも持つて出直してこいや。」

「うあえず、反射機能はオフになつてゐる。しかしその分硬くなる、広くなるだからなあ。

「もう諦めりよ。いまならジュールシード渡すから。家に帰つて飯作らなことつて話しきけよお」

「やつちりやええ。」

あおむな娘よ。そしてさよなら。見知らぬ金髪マントよ。

「何処にでも飛んでいけ。ジュールシードよ。」

「ういい、ジュエルシードをぶん投げる。

危険？九尾が危険な方が俺には耐えられない。

「どこにいたのがあつたのさ。」

「君は誰に向かつていつてゐるんだ？」

「今の心境を整理してただけだよ。」

現在、アースラ内部にて高町さんとフューレットが人間になつたユーノと呼ばれる人と馬鹿と同じ場所にいます。

ユーノさんつて九尾と同じかな。動物が人になる、人が動物になる

ができるから。

「なあ。どうして俺まで行かないといけないんだよ。帰らせてくれよ。ようがあるのは高町さんあけだらう。」

「やういうわけには行かない。艦長の命令だからな。」

そういうわれて来たのは艦長の部屋らしい。

部屋を見た感想は、日本を勘違いした外国人と言う所だらうか。なぜ、盆栽がある。茶釜がある。しそおどしがある。絶対おかしいだろう。九尾そんなそわそわするな。

「おつかれさま。まあどうぞどうぞ。楽にして。」

そう言われたのでひざの上に九尾を乗せて座る。

そこからの話はよく分からなかつた。ジュエルシードを発掘したのがゴーノさんで回収しようとしたとか。

「あの、ロストロギアって、何なんですか。」

おい、それを聞くのかよ。まずい、ばれる。

そこから聞いたのはオリエアとあまり変わらないものだつた。

「使用法は不明だが使いようによつては世界どじるか次元空間さえ滅ぼす力を持つこともある。危険な技術。」

技術と言つより、妄想の產物、空想の產物なんだが・・・・。

「然るべき手続きをもつて、然るべき場所に保管されていなければ

いけない品物。」

オリエアでめえそんなもの持たせたのかよ。

「あなたたちが探しているロストロギア、ジュエルシードは次元干渉型のエネルギーの結晶体。幾つか集めて、特定の方向で起動されば空間内に次元震を引き起こし、最悪の場合次元断層さえ巻き起こす危険物。」

あ〜、そんなものが九個もあるんだ。絶対つかまるだろ？

そこからは話が頭に入っこなかつた。考え方しているから当たり前か。

「これよりロストロギア、ジュエルシードの回収については時空管理局が全権を持ちます。」

「君たちは今回のことを忘れて、それぞれの世界に戻つて元通りに暮らすといい。」

「分かりました。答へはイエス。だから早く返してください。」

「じゃあ君の持つてこるロストロギア全部置いてこつてもうおうか。」

「

「なぜ？」

「危険物だからだ。早く出してもらおう。」

「仕方ないなあ。ほれ。」

そういう、太刀、小太刀、木刀を馬鹿に向かつて投げる。
しかし忘れているのだろうか、俺以外の人気が触ると…

「があああああああ」

「うなる。かなりの痛みらしい。叫びでわかる。
九尾が泣きそだから取り上げた。

「俺以外の人が触るというなるんですよ。だから渡したくなかった
のに。」

「それを分かつていて出しのかしら?」

「だつて、危険物で保護しないといけないとかわしきの話で言つて
たから出したわけで…それで何してるんだ。と申されましても。」

「早く帰りうよ。」

「九尾まあまで。三つ回収してからな。」

「ううい、三つとも手に持けいつもの通り腰に掛ける。

「あなたはなんともないのかしら?」

「そんな事知るわけないじゃないですか。そもそもこれが危険物と
は知りませんでしたから。」

まあ、全部嘘だけどな。

「じゃあ帰ります。九尾行くぞ。」

そう言つと思い切り太刀で空間を切り裂き、自分の家まで空間をつなげた。簡易式ワープだ。

「それじゃ、皆さんようなら。」

そう言ひ家に帰つた。今田の夕飯何にしよう~

第一十一話 やつたことは仕方ない。その後やつあるかが問題だ（後書き）

長い・・・書きたい」と書いたらいつなつた

第一十一話 森とヨヤのハンカウント率は異常（前編）

はははきえたきえたよ。

投稿しようつとしたらできませんとか、大晦日にやるのがいけないのか。

ああ、齶だ

第一十一話 森とヨヤのウンカウント率は異常

あらすじ

アースラに行きました。え? ジュエルシード、九個ありますよ?

「やつちました。やつちましたよ。これで立派な犯罪者だ……あはは、笑うしかな」よ。

時空管理局って警察みたいなものだよな…

「元気だして、これあげるからー。」

そういう九尾が出したのは青い色をしたひし形の石で……ってあれ?

「俺ぶん投げたよな……それを追つて金髪マントと狼から逃げたわけだし。」

「かんたんだよー。偽物を作ればこいつだからー。」

「語尾伸ばすのやめろ。そして偽物つて何だみつ。」

「偽物は偽物だよ? 世界の管理者の娘にふかのーはない!」

「はこはい、血彌血彌」

でもどうするか。ジュエルシードで二十一個、その中の半分の十個は俺が持っている…

あ。終わった。金髪マントがもしにのじて気がづいたら殺されると

アースラ組にもばれたら最悪身柄拘束だらう。

「よし、逃げよ」『きやあ』つて・・・

そこから先は言えなかつた。なぜなら…

顔が泣きすぎてはれている最高神オリエア、苦笑いのオリ、ビキビキと音が聞こえてきそうなほどお怒りでいらっしゃる九本の尻尾がある年上の女の人が九尾を抱えてこちらを見ている。

「OHANASIか、天獄に逝くか。どちらがよい?」

「「もぢろとOHANASIで…」」

オリエアとハモリつつ土下座をする。怖くて頭を下げたまま上げられない。

「もう一度言ひ。OHANASIといつ肉体言語と精神ダメージか、『天国に居るのに地獄のような苦しみにもだえる』のどちらがいい?」

「「OHANASI」」

天獄とか最初漢字が違うと思ったがそのままの意味だとは…

（OHANASI中）

『おいオリエア、生きてるか』

『生きてるが死にそうじゃ』

「セニー念話で会話するなー。」

「読まれたのかー。」

「わしよつ上の管理者じやよ?心を読むのは簡単じやない。」

「おだてても意味ないからな。」

「懲りりますOHANASHI中~

「ああ、死んだ妻が川の向こうで手を振りながら叫んでる。なに? く・・・る・・・な・・・つてなぜじやあああ

「うぬれこ。」

「オリHニア三時間追加」

「そんなん。」

「OHANASHI終了」(オリHニアあと三時間)~

「何故怒られたんですか?..」

「あいつはまた書類ミスをして勝手に転生せたんだ。まつたくこの世界にひきこみお前と同じ歳の転生者が増えるぞ?だからあんな風に罰を下されるんだ。」

「でも、田の前で無邪気にゲームデータのアイテム消し、その後セーブデータ消去、メモリー粉碎、バックアップ削除、ロムとカセット破壊、続けて本体破壊はきつづないか?」

九尾がきやつきやつ言いながら次々オリエアのデータを台無しにしていく。オリは苦笑い。

オリエアは、わしの嫁が・・・嫁が・・・とか言つてゐる。あんた妻が居たんじゃないのか?

「俺は何故怒られた?」

「娘を泣かせたでしょ!そして娘を危険な目にあわせたこと。そしてジユエルシードあんなに持つてるって馬鹿なの?」

「全部あなたの娘が持つてきたんですけど・・・」

九尾は泣き田になりしきりに来る。可愛いなあ。すくへ癒される。

「私だめなこと・・・したの?」

「そんな事ないわよ。本当にー。」

すくに慌てて誤解を解く。ここつも親馬鹿で子煩惱とか。世界管理できるのか?

「大丈夫よ。世界なんて独自に進んで勝手に滅んでまた進むんだから。それよりきつこいのは、転生者が増えたせいで私の管理者と言つ席を狙つてくる奴が多いのよ。」

「じゃあ最初に出会った時の傷は……」

あのときの酷い傷を思い出す。

「さうよ。狙つてきた奴らに不意打ち食らつたからね。」

「はあ、さうですか。じゃあ娘を預けたのも。」

「さうよ。危険な目にあわせたくないため。身勝手なことだと想つけど。」

「親が子を思つことは当たり前だと思いますよ？ 特殊な場合を除いてですが……」

「おかーさん。もう帰らないといけないの？」

・
そう九尾が言つ。そつかこに来たといつことは引き取りに……

「そんな事ないわよ。一緒にいたいのでしょ？ だったら娘の願いを聞き入れるのは親として当たり前よ。」

そんなことを言つ。恥ずかしい。とても恥ずかしい。

「オリは何で來たの？」

「親父の付き人。そしてひとつ終わりを見届けるために。」

「さうじやよ。最高神自ら出でたのじやからな。」

「終わりって何が終わるんだよ。」

「全ての歪みが一度終わるのよ。それを見届けるために、全世界の管理者の私、イステールと」

「」の世界の管理者オリエアと息子のオリが来たといつわけじゃ。

終わりか・・・色々合ったよなあ。

転生して、親に会って、楽しく暮らした。

でも親が死んで絶望して憎悪して裏切られた気がしたよなあ。

それで、九尾と会って、一緒に暮らして、ジュエルシードってアレ

?意外に短かつたなあ。

「それを人、死亡フラグと言つ。」

「え！死んじゃうの？」

「俺は化け物だから死なないって、久しぶりに化け物つていつたなあ。」

さてと逝きますかね。崩壊したものをゼロに戻すため」。

第一十一話 森とヨヤのハンカウント率は異常（後編）

毎回タイトル関係ないといつ。

第一二三話 ハラカマ（心的外傷）（前書き）

物語は置いてきた。深く関わるのはいつも最後だけ。

おいしいところ全部持っていくんだ！

そして原作が壊れるのが嫌と言つ人は見ないほうがいいでしょう。

第一二三話 マリウマ（心的外傷）

あらすじ

世界の管理者の名前を知り、死亡フラグが立ちました。死なないけどね！

「俺が死ぬのは、化け物じゃなくなつたときだ！」

「急に叫んでびびつた？」

「頭がいかれたのじゃね？』

「あいつと娘の可憐さに頭をやられたのよ。』

「ハアハアいいながら言われても説得力に欠けるんじゃが。』

「いこよつて言つてるのは上から、俺、オリ、オリエア、イスティル、オリエアだ。

九尾は寝ている。それよりも…

「何でここに張り込みしてるんだよ・・・」

「『ソレ』で名シーンの数々が生まれるんじゃから黙つて待つて！』

「そんなことを言われた。いつまほも知らないっての。』

「まひ、始まるだ。』

せつまわれて見ると高町さん、オレンジっぽい狼、フーレットと公園灯の上に金髪マントがいた。

となりで、

「生なのは、生フェイトハウア。だが淫獣。てめえはだめだ。」

といいながら皿が血走り、顔は真っ赤になつてゐる。淫獣つて誰だらう。

「ひい、ふつ、みいつて高町さんが五個、金髪マントが九個、俺十個、あれ? 足すと二十四とか。」

「簡単じゃよ。九尾が作った物も偽物じやから三つ偽物があるといふことじやる。」

「三つじゃなくてないか?」

「そんな事ないじやる。アルハザード行くには必要だし。」

「アルハザードってなんだよ。」

「忘れられた都市。またの名を管理者のおもちゃ箱。」

「「は?」」

「お、オソとハモッた。」

「なんだよ親父。おもちゃ箱って聞いたことないぞ。」

「機会がないからの。ゲームでいつどバッカルーム。色々な能力を管理者が作った能力を保管するんじや。ちなみに製作者イスティル、わし。管理者イステールじやよ。」

「親父、後ろに気をつけろよ。」

「なんじゅよ・・・って、アツー———」

断末魔が聞こえた。合掌。

「イステールさんなんて物創ってるんですか。」

「だつて何億つて生きて世界を見るのつてつまらない物なの。だから創った。後悔してない。」

「そうですか。」

その前にあの戦いすごいよな

魔力弾撃ち合いながらかわしつつ、さらに出すとか。

魔力弾を叩き消すとか。勉強になるよなあ。オリはうんうん頷いてるし。

でかい魔方陣を金髪マントを描いている。高町さんの周りにも魔方陣が出てくる。

「魔法つてすゞいよな。」

「そうだな。だがお前は魔法もどきなう使えるだろ?。」

「魔力のない魔法は魔法じやないと思つけど。」

「だったら、娘と契約すればいいじゃない。魔力供給してもらえるわよ。」

「魔力じゃなくて神通力じゃなかつたか？」

「細かいことは気にしないのオリ君。」

「なあオリ、神ってキャラ簡単に変わるのか？」

「仕事と私事の区別してるんだろう。親父も見習つて欲しいよ。」

「まだ、オリエアはがんばれ。だと、負けるな。とか言つてるし、どんだけ好きなんだよ。」

「おお、フォントランサー・ファランクスシフトじゅー・スゴイの。」

「

「でも無傷とかおかしいだろ。」

「それはきっとなのはちやんがすごいからじゅる。」

「そうだ。無傷つて事は防御型か？そしたら攻撃は手数より一撃の方がいいのか？とか思う。でも、戦闘狂じやないし、バトルジャンキーでもないからね。」

「ここからがオーバーキルなんじやよなあ。」

「そつ啖きが聞こえたので見る。」

そこには、桃色のレーザーをバリアで防いでいる金髪マントがいた。

「ああ、防ぎあつた。」

「まだじゅうこからがトラウマにもなる地獄じゅう。」

高町さんがまた魔力を集めていた。

このとき最高神は後こうついづ

「あの桃色の光線に飲まれたらいやじゅう。非殺傷だから苦しむし。また生で見ると迫力が……」

と他の神に伝えるのであった。

金髪マントが桃色の光線にのみこまれた。

「海がすう」とこなつてこる。これって現実?」

「現実だらうね。」

俺の疑問はオーリとイーステールのよつて肯定された。

第一二三話 ラウマ（心的外傷）（後書き）

アルハザードについては見た感じ“神ならいけるって”見たいに崩壊させました。

おもちゃや箱といつのは、管理者が適当作つた能力の宝庫だから時を操り、死者さえも蘇らせるなんてのは簡単にたくさんあるんです。原作好きの方スマスマセン。

第一十四話 それぞれの考え方（前書き）

今回転生者が出でます。そしてどうぞお読みなさい。

注意 この作品はフィクションです。現実に実在する物とは一切関係ありません。

第一十四話 それぞれの考え方

ありすじ

トライアスリットセコムーあるとつりこよねー

「へぬわ。」

「何がくることだつて。」

「紫の雷じや。」

雲が空で渦巻き、紫色の落雷が金髪マンントにぶつかる。ジユエルシード=雷の中央。

「よこむべか。」

「何処に。」

「時の庭園じやよ。」

やつこい俺たちオーリーAによって時の庭園に飛ばされた。

～武装回員（転生者）～

「俺たち転生者はこの田のために管理局に入った。まずはじめにどうぞいかしよう。田標はドライ書いて見る。」

「ハッ。アリシアさんに私たち能力で魔力をアリシアさんに注ぎ、復活させることです。」

「よし、じゃあカイル。どう行動するか言つて見ろ。」

「ハッ。まずは俺たちの能力でプレシアさんの無力化。プレシアさんを助ける者とアリシアさんを助ける者の一組に別れ、救済してハッピーエンドです。」

「ハツ 悲しい運命を無くす為にです。そしてみんなで笑うためにです！」

「よく言つた。そのために転生し原作を捻じ曲げるー小澤だとか言う奴は邪魔だ。見つけたら始末しろ！」

「「「「「イエス、ラルフ！」」」」

「よし行くぞ！ われらテスタロッサ家のために！」

(まあお前たちは用済みになつたら始末するがな)

ある者は、血の憑このために・・・・

武装局員（転生者） side out

♪アースラ side

「ビンゴー尻尾つかんだ！」

「よし。不用意な物質転送が命取りだ。座標を。」

「もう割り出して送ってるよ。」

「武装局員、輸送ポートから出動。任務はプレシア・テスタロッサの身柄確保です。」

またある者は任務のために・・・・

♪アースラ side out

♪プレシア side

玉座に座り吐血する女性が独りジュエルシードに囲まれている

「ゲホッ。ゴホッ。・・・次元魔法はもう体が持たないわ。それに今までこの場所が捕まれた。フェイトあの子じゃダメだわ。」

「そろそろ潮時かもね。」

またある者は自分の願いを叶えるために・・・・

♪プレシア side out

第一十四話 それぞれの考え方（後書き）

新しい書き方をしてみました。とても書きにくい……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7367z/>

魔法少女リリカルなのはって何？

2012年1月8日18時15分発行